富山市埋蔵文化財調査報告25

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ

— 若竹町遺跡・富崎遺跡 —

2008

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告25

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ

— 若竹町遺跡・富崎遺跡 —

2008

富山市教育委員会

例　言

1　本書は個人住宅建築に先立つ平成19年度富山市内遺跡の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は、富山市教育委員会が主体となって実施した。調査費用については富山市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。
3　本書で報告する遺跡の名称・現地調査期間・整理作業期間及び発掘調査面積は次のとおりである。

若竹町（わかたけちょう）遺跡	発掘作業	平成19年8月8日～平成19年9月22日	275㎡
（富山市悪王寺地内）	整理等作業	平成19年9月23日～平成20年3月18日	
富崎（とみさき）遺跡	発掘作業	平成19年11月5日～平成19年11月28日	108㎡
（富山市婦中町富崎地内）	整理等作業	平成19年11月29日～平成20年3月18日	

4　調査担当者
　若竹町遺跡　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
　　　　　　　主任学芸員　堀内大介、嘱託　真田泰光、嘱託　長谷部真吾
　富崎遺跡　　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
　　　　　　　主任学芸員　鹿島昌也、学芸員　野垣好史、嘱託　鍋谷仁美
5　現地発掘調査及び資料整理に際し、下記の諸氏、諸機関のご指導、ご協力をいただいた。記して謝意を表します。（敬称略）
　森隆、富山県教育委員会生涯学習・文化財室、富山県埋蔵文化財センター、悪王寺町内会、婦中町富崎町内会
6　出土遺物・原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。
7　本書の執筆・編集は、若竹町遺跡を堀内、富崎遺跡を鹿島・鍋谷が行った。文責は文末に記した。

凡　例

1　本書で用いた座標は世界測地系に準拠した。方位は真北、水平基準は海抜である。
2　遺構の標記は、以下のとおりである。
　竪穴住居：ＳＩ、掘立柱建物：ＳＢ、土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、ピット：ＳＰ・Ｐ、不明遺構：ＳＸ

目　次

Ⅰ　若竹町遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1～10
　ｉ）調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　ii）遺跡の位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　iii）調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3～5
　iv）まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Ⅱ　富崎遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11～20
　ｉ）調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
　ii）遺跡の位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
　iii）調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13～19
　iv）まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18・20
写真図版
引用・参考文献
報告書抄録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

Ⅰ 若竹町（わかたけちょう）遺跡

i）調査に至る経緯

若竹町遺跡は、昭和63年～平成3年に富山市教育委員会が実施した分布調査で発見した遺跡である。遺跡は平成5年3月発行「富山市遺跡地図（改訂版）」に搭載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。

平成19年4月2日、個人住宅建設について埋蔵文化財所在の照会がなされた。建設予定地全域414㎡が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、同年4月24日に市教委による試掘確認調査を実施し、全域414㎡に遺跡の所在を確認した。調査では平安時代の土坑・溝・ピットが検出され、平安時代の須恵器・土師器が出土した。

この調査結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、宅地部分の地盤改良工事及び擁壁部分の掘削工事が遺構面に達することから宅地部分と擁壁部分275㎡について発掘調査を行うこととなった。

ii）遺跡の位置と環境

若竹町遺跡は、富山市街地より南へ約6㎞の富山市悪王寺地内に位置する。本遺跡は、常願寺川と神通川に挟まれた複合扇状地上にあり、熊野川の支流土川の右岸にある。標高は36m前後である。

周辺には縄文時代より遺跡が確認され、各時代の遺跡が存在する。

縄文時代では、吉岡遺跡、悪王寺遺跡、任海宮田遺跡（後晩期）などが知られている。吉岡遺跡では、石組炉・配石等が検出され、その周囲に遺物が散乱して出土している。

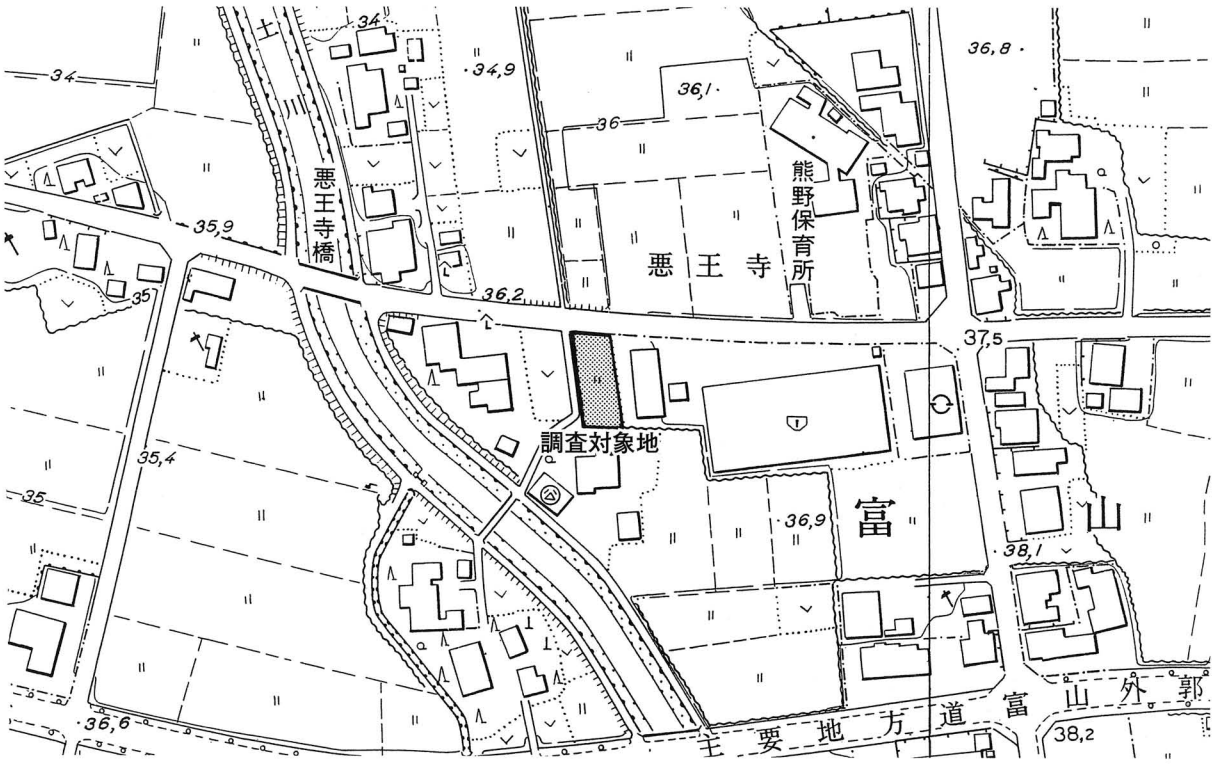
弥生時代では、吉岡遺跡（中期）、黒瀬大屋遺跡（後期）などが知られるが、希薄な状況である。

古墳時代では、任海宮田遺跡・上新保遺跡等が知られるが、弥生時代同様に希薄な状況である。

古代に入ると、確認される遺跡数は増加し、周辺の開発が進んだことが分かる。任海宮田遺跡・吉倉Ｂ遺跡・友杉遺跡・吉岡遺跡・経力遺跡・上新保遺跡などが知られている。任海宮田遺跡を中心とする新保地区では、「城長」「観音寺」「寺」等の墨書土器やメノウ製帯飾り等が出土し、寺院や官衙等の公的施設が存在していたのではないかと考えられている。吉岡遺跡や経力遺跡、上新保遺跡では竪穴住居跡や畑跡が検出され、大規模な集落跡が存在していたと考えられている。発掘調査の成果から7世紀後半～8世紀代に小規模な集落が出現し、9～10世紀前半に最盛期を迎えるが、11世紀には一時衰退し、中世に入る12世紀代から再び遺跡が確認されるようになる。

中世になると、再び周辺の開発が始まり、集落が広がったと考えられる。新保地区は、『加茂別雷神社文書』の中の寿永3（1184）年の源頼朝下文などの文献にみられる「加茂社領新保御厨」の比定地候補の一つとされている。また、中世に起源を求められる城跡、寺跡、豪族の館跡などの遺跡も多く分布する。上熊野城跡では土塁や堀の一部も確認されている。本遺跡南方には、中世の豪族・蜷川氏の城館である蜷川館跡があり、同地内にはその菩提寺とされる曹洞宗・最勝寺が現存する。布市は、康永3（1344）年に越中守護となった桃井直常が観応の乱で足利方に敗れた後に余生を過ごした地という伝承が残されており、上新保に在住する桃井家はその末裔という。布市にある曹洞宗太平山興国寺は興国6（1345）年直常開基を伝え、周辺には中世寺社七宮七寺があったと伝えられている。

1.若竹町遺跡　2.悪王寺遺跡　3.吉岡遺跡　4.経力遺跡　5.上栄遺跡　6.布市遺跡　7.興国寺館跡　8.石田打宮遺跡　9.石田遺跡
10.石田北遺跡　11.二俣遺跡　12.上野亀田遺跡　13.上野鍋田遺跡　14.上野井田遺跡　15.蜷川館跡　16.友杉遺跡　17.任海宮田遺跡
18.任海池原寺跡　19.吉倉B遺跡　20.任海鎌倉遺跡　21.任海遺跡　22.栗原楮原遺跡　23.栗山A遺跡　24.安養寺遺跡
25.下熊野遺跡　26.宮保遺跡　27.辰尾遺跡　28.上熊野八幡遺跡　29.上熊野遺跡　30.上熊野城跡　31.森田・森田瑞泉寺遺跡



第1図　周辺の遺跡位置図（1/25000）及び調査対象地位置図（1/5000）

iii）遺跡の位置と環境

1. 調査概要

(1) 調査の方法

発掘作業は平成19年8月8日から9月22日まで行った。表土掘削は平成19年8月8日からバックホウを用いて行った。表土除去完了後の平成19年8月20日から人力による包含層掘削・遺構検出作業を行い、その後遺構掘削作業を開始した。

掘削作業と平行して遺構の計測・図化作業を実施した。平面図はトータルステーションによる計測を基本として1/20で作成し、必要に応じて1/10の微細図を併せて作成した。写真撮影は必要に応じて随時行い、白黒35㎜、カラースライド35㎜、白黒6×7版、カラースライド6×7版の4種類のフィルムに記録した。平成19年9月21日に空中撮影を行った。

遺物整理・報告書作成作業は、現地調査終了後平成20年3月17日まで行った。

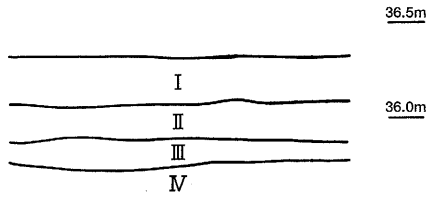
(2) 調査の方法

Ⅰ層　茶褐色土。水田耕作土

Ⅱ層　灰黄褐色土。

Ⅲ層　黒褐色土。遺物包含層。

Ⅳ層　黄褐色砂質土。地山。遺構検出面。



第2図　基本層序図

2. 遺構

発掘調査は宅地部分と擁壁部分で調査を行ったが、遺構は宅地部分のみで確認された。宅地部分の南西部から南側擁壁部分にかけて後世の削平を受けていた。

(1) 竪穴住居（第4図、写真図版2・3）

SI01　X123～129、Y616～620で検出した。長軸4.30m×短軸3.40mの方形を呈し、深さ20㎝を測る。主軸方向はN－7°－Wとなる。南西隅に小溝があり、周壁溝の可能性がある。竈は西壁南寄りに位置する。試掘トレンチによる削平のため全体像は明らかではない。袖は粘質土により構築されている。煙道部は緩やかに立ち上がる。北東部の床面に焼土が広がっている。覆土から弥生土器、土師器、鉄滓などが出土している。

(2) 掘立柱建物（第4・5図、写真図版3・4）

SB01　X122～128、Y615～621で検出した。SI01の煙道部・SK08を切っている。長軸4.70m×短軸4.15mの2間×2間の側柱建物である。主軸方向はN－8°－Wとなる。柱間距離は長辺が2.30～2.40m、短辺が2.05～2.10mである。柱掘方は径50～70㎝の円形～楕円形の平面形で深さ25～40㎝である。柱跡の覆土から弥生土器、古式土師器、土師器が出土している。

SB02　X123～129、Y616～620に位置する。SK05・畑跡を切っている。長軸4.80m×短軸4.05mの2間×2間の総柱建物である。主軸方向はN－8°－Wとなる。柱間距離は長辺が2.40m、短辺が2.00～2.05mである。柱掘方は径20～50㎝の円形～楕円形の平面形で深さ25～40㎝である。柱跡の覆土から中世土師器が出土している。

(3) 土坑（第4・5図、写真図版2・3）

SK01　X124～126、Y620～621で検出した。SI01・SB01に切られている。西側が撹乱で削平されているが、長軸0.95m以上、短軸0.80mの楕円形を基調すると思われる。深さ15㎝を測る。覆土から弥生土器が出土している。

SK02　X123～125、Y620～621で検出した。西側が撹乱で削平されているが、直径1.1mの円形を基調すると思われる。覆土から縄文土器、弥生土器が出土している。

SK03　X122～124、Y618～620で検出した。長軸0.80m、短軸0.60mの楕円形を呈し、深さ35cmを測る。包含層を掘りこんでいる。覆土から縄文土器・弥生土器が出土している。

SK04　X122～124、Y620～623で検出した。長軸1.45m、短軸1.05mの不整形を呈し、深さ20cmを測る。覆土から弥生土器が出土している。

SK05　X112～116、Y622～626で検出した。SB02・畑跡に切られている。南側が調査区外に延びるため規模形状は不明だが、長軸3.40m、短軸2.30m以上の隅丸方形を基調すると思われる。主軸方向はN－30°－Wとなる。床面は平坦である。柱穴・硬化面等は確認されなかった。覆土から弥生土器、打製石斧、砥石が出土している。

SK08　SI01内で検出した。SB02・SK09・SX02に切られている。直径1.3mの円形を呈し、深さ25cmを測る。覆土から弥生土器が出土している。

SK09　SI01内で検出した。SK08を切っている。長軸1.17m、短軸0.45mの長楕円形を呈し、深さ15cmを測る。SI01の焼土を切っており、覆土に焼土が混ざる。覆土から弥生土器、土師器が出土している。

(4) 畑跡（第6図、写真図版2・4）

調査区東側で検出した。SB02に切られている。幅が20～30cm、深さ5～20cmとなる。主軸の方向はN－70～87°－Eを示す一群とN－30～45°－Wを示す一群がある。覆土から弥生土器、土師器などが出土している。

3. 遺物（第6図、写真図版2・4）

SI01　1～11は弥生土器である。1は有段口縁甕である。2～6は壺である。2～4は有段口縁壺である。2は内面に赤彩が施される。3は口縁部に凹線が施され、口縁端部外面に赤彩が施される。5・6は長頸広口壺である。5は内外面に赤彩が施される。6が口縁端部に刻みが施され、口縁部外面に擬凹線が施される。7は甕か壺の底部である。8～11は高杯か器台の脚部である。12・13は土師器である。12は甕である。口縁部内面に煤が付着している。内外面とも剥離している。13は鍋である。14は鉄滓である。15は須恵器の無台杯である。試掘時に竈の焼土の上で出土した。外面に煤が付着している。

SB01　16は弥生土器の有段口縁甕である。外面に煤が付着している。SP62から出土した。17は古式土師器の布留甕である。SP54から出土した。

SB02　18・19は中世土師器皿である。18は内外面に指頭圧痕がある。SP42から出土した。19は内面に煤が付着している。灯明皿として使用していたと考えられる。SP44から出土した。

SK02　20は縄文土器の鉢である。口唇部に浮線文状に摘み上げが施され、その下に集合沈線の連弧文が施される。21は弥生土器の高杯か器台の脚部である。

SK04　22は弥生土器の有段口縁壺である。

SK05　23～26は弥生土器である。23は有段口縁の甕である。外面に煤が付着している。24・25は「く」の字状口縁の壺である。26は甕か壺の底部である。27は打製石斧である。凝灰岩である。28は砥石である。表面に鉄器を研いでいた跡が見られる。角閃石安山岩である。

SD14　29は縄文土器の深鉢の体部片である。斜縄文が施される。

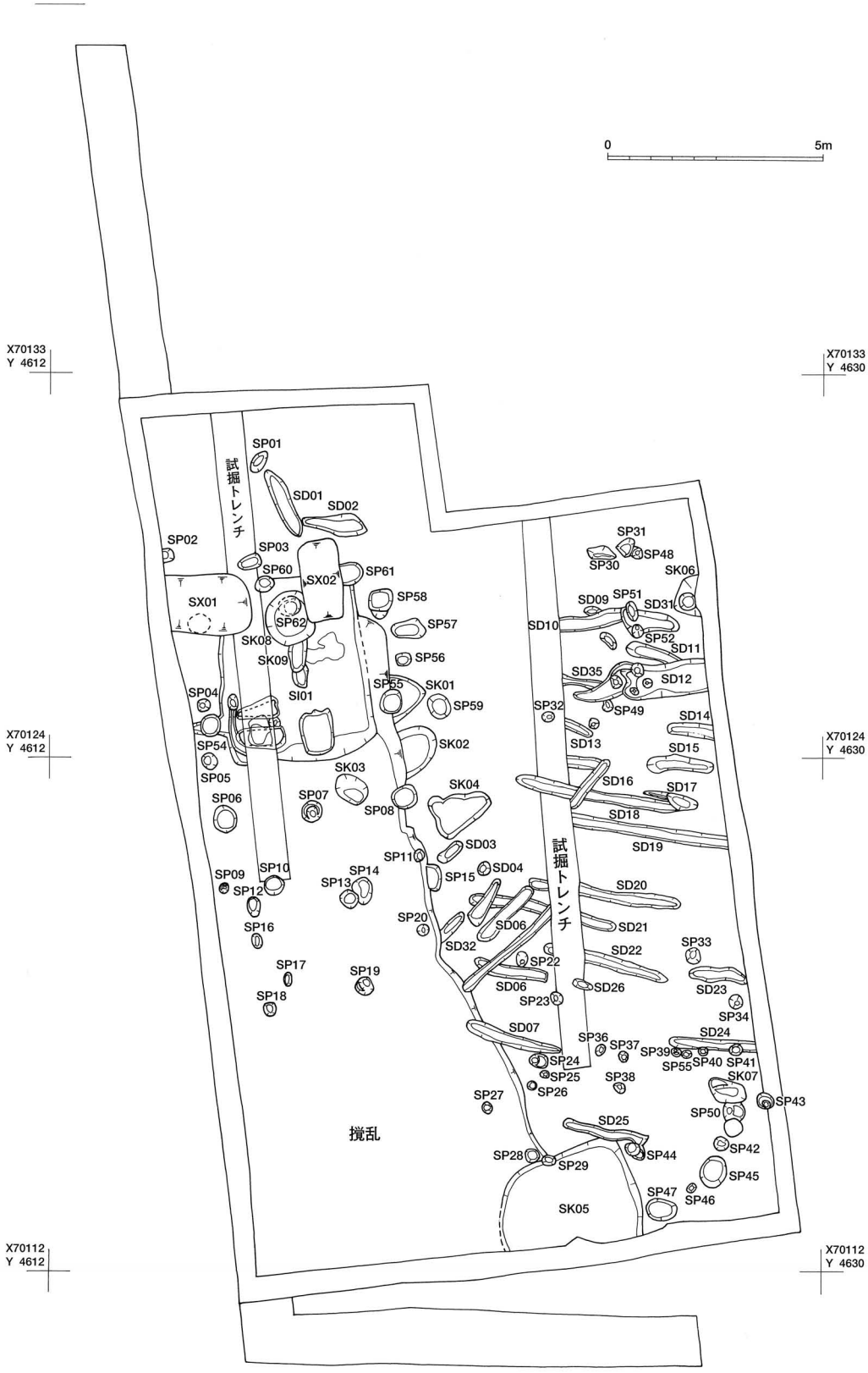
SD21　30は近世陶器の壺である。

SD24　31は中世土師器皿である。外面に指頭圧痕がある。
SD33　32は縄文土器の鉢である。口縁部より条痕が施される。
SP15　33は弥生土器の有段口縁壺である。
SP50　34は古式土師器の小型壺である。35は中世土師器皿である。
SP51　36は縄文土器である。浅い沈線の下に斜縄文が施される。
SP52　37は弥生土器の高杯か器台の脚部である。内外面に赤彩が施される。
SP57　38は弥生土器の直口壺である。
SP60　39は弥生土器の高杯か器台の受部である。
SP63　40は弥生土器の高杯か器台の脚部である。外面に赤彩が施される。
包含層　41～44は弥生土器である。41は有段口縁甕である。口縁部に擬凹線が施される。42は有段口縁壺である。43は「く」の字口縁壺である。44は高杯の体部片である。2孔が並ぶように開けられており、5箇所開けられていると考えられる。45･46は須恵器の杯蓋である。47は土師器の鍋である。48は中世土師器である。49は天目茶碗である。越中瀬戸と考えられる。50は越中瀬戸の丸皿である。高台は付け高台である。鉄釉が内外面に施される。51・52は近世磁器である。51は皿で、内面及び口縁部外面に銅緑釉が施される。52は紅皿で、内面に透明釉が施される。

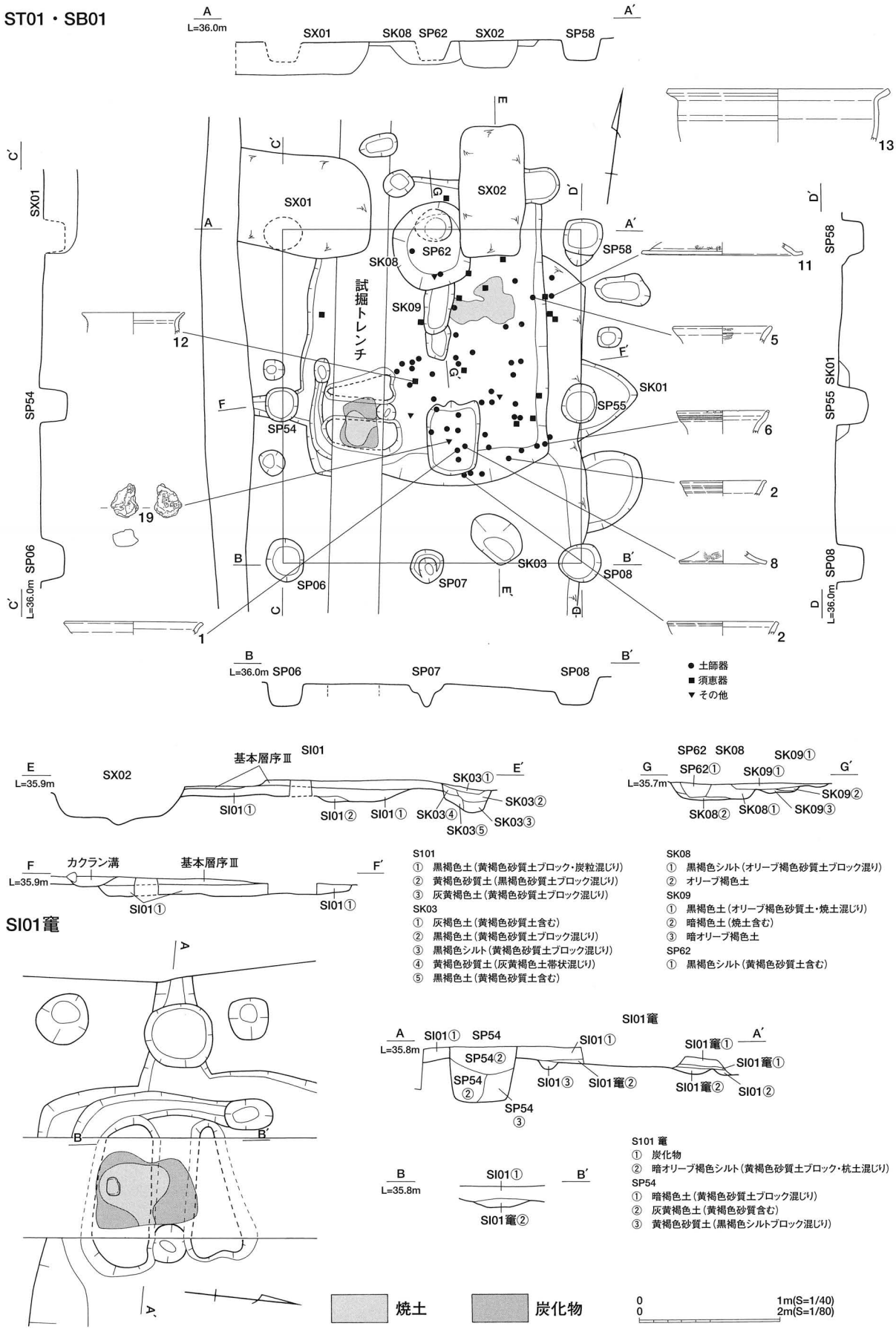
ⅳ）まとめ

縄文時代　出土した遺物は縄文時代晩期に位置付けられる。調査区北東600mにある吉岡遺跡では縄文時代晩期の住居跡を検出しており、今回の調査区では遺構は確認されなかったが、縄文時代晩期の遺構が周辺に存在しているのかもしれない。
弥生時代　土坑4基を検出した。竪穴状土坑（SK05）は炉等の施設がなく全体の規模も撹乱による削平や調査区外へ広がるため不明確ではあるが、検出された規模と形状が竪穴住居とするのに十分であること、底面に硬化面は認められないがほぼ水平・平坦であることなどから竪穴住居であると考えたい。出土した遺物は法仏式に位置付けられる。
古墳時代　出土した遺物は古墳時代前期に位置付けられる。今回の調査区では遺構は確認されなかったが、古墳時代前期の遺構が周辺に存在しているのかもしれない。
平安時代　竪穴住居（SI01）を1棟検出した。床面に竈以外で焼土の広がりがみられ、建物内部で火を取り扱う作業を行っていたのかもしれない。掘立柱建物（SB01）の柱穴はSI01の煙道部の上に作られており、SI01廃絶後に建てられたと考えられる。畑跡の上に鎌倉時代の掘立柱建物（SB02）が建てられており、畑跡はそれ以前の遺構である。
鎌倉時代　掘立柱建物を1棟検出した。柱穴内から中世土師器が出土しており、森編年（森2005）の前Ⅴ期（13世紀中頃）に位置付けられる。

（堀内）

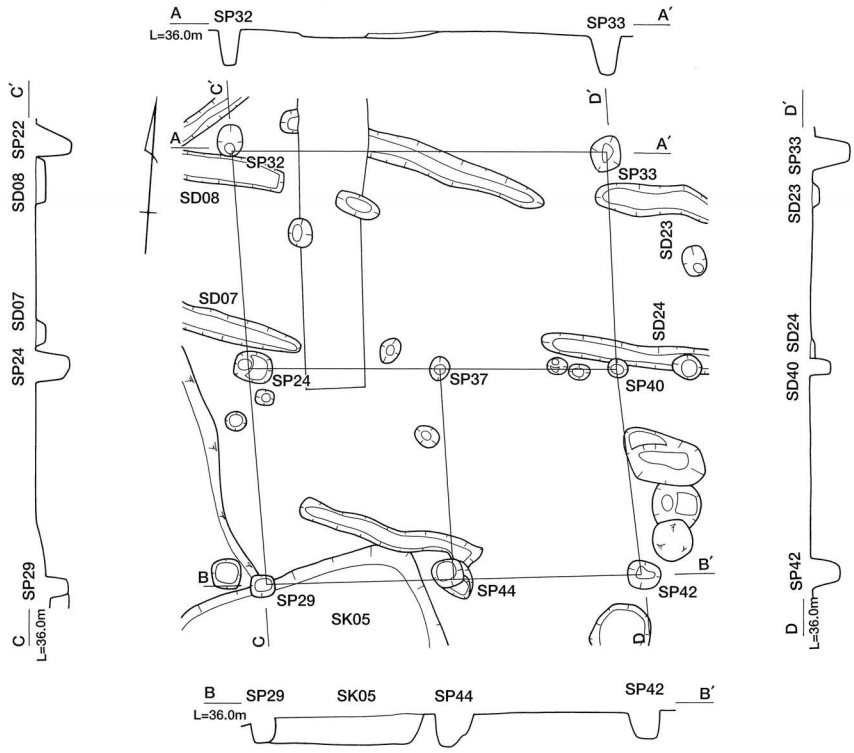


第3図　若竹町遺跡全体遺構平面図（S=1/150）

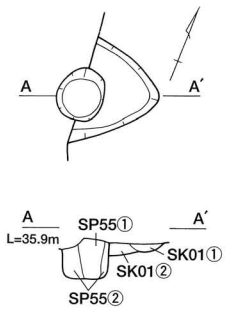


第4図　S101・SB01平面及び断面図（S=1/80）、S101竈平面図及び断面図（S=1/40） 遺物は1/8

SB02



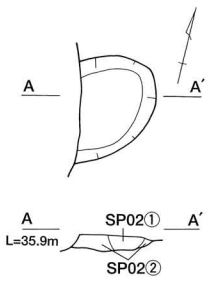
SK01・SP55



SK01
① 黒褐色土（黄褐色砂質土ブロック混じり）
② 灰褐色土（小礫混じり）

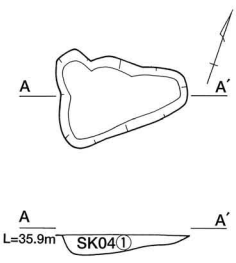
SP55
① 黒褐色シルト（黄褐色砂質土含む）
③ 暗褐色土（黄褐色砂質土含む）

SK02



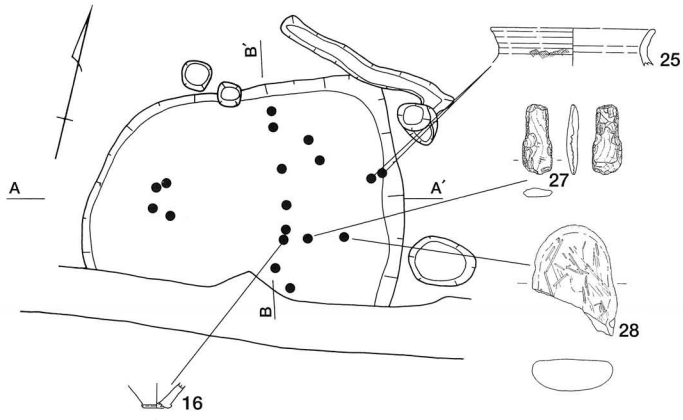
SK02
① 黒褐色土（暗褐色土ブロック混じり）
② 暗褐色土

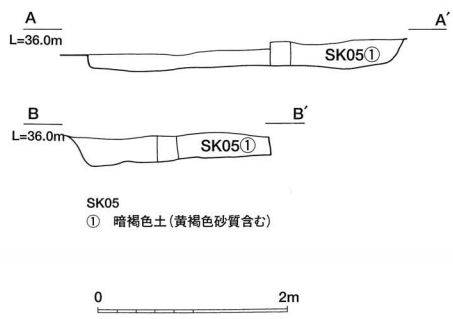
SK04



SK04
① 暗褐色土

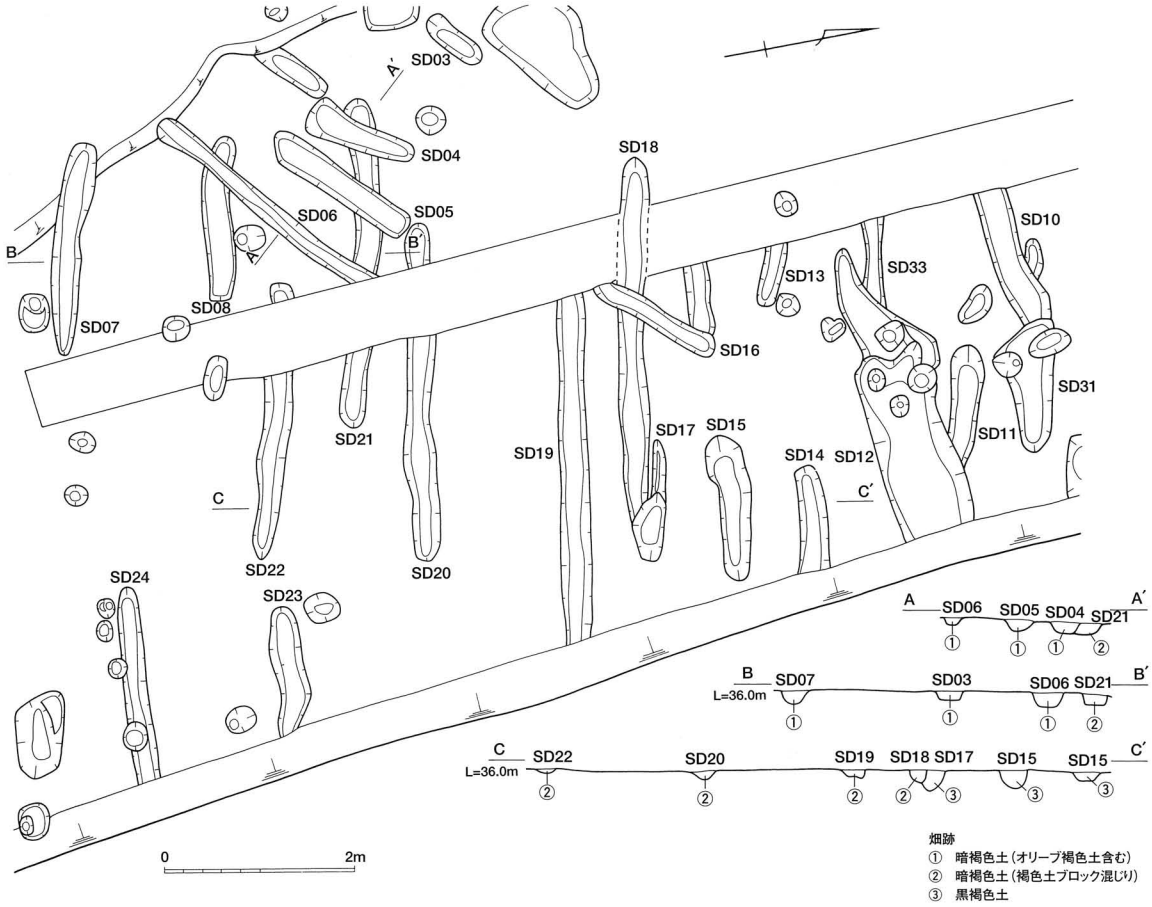
SK05



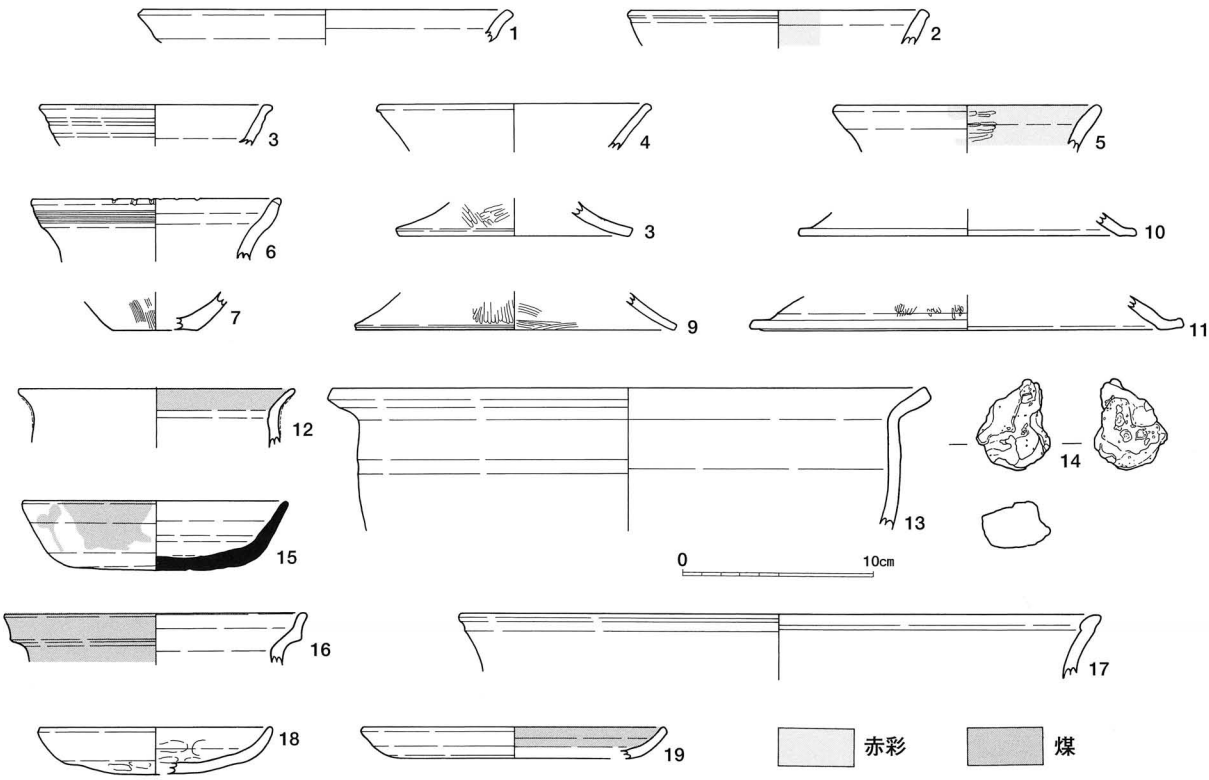


SK05
① 暗褐色土（黄褐色砂質含む）

第5図　SB02・土杭平面図及び断面図（S=1/80）遺物は、25,26が1/8、27,28が1/16

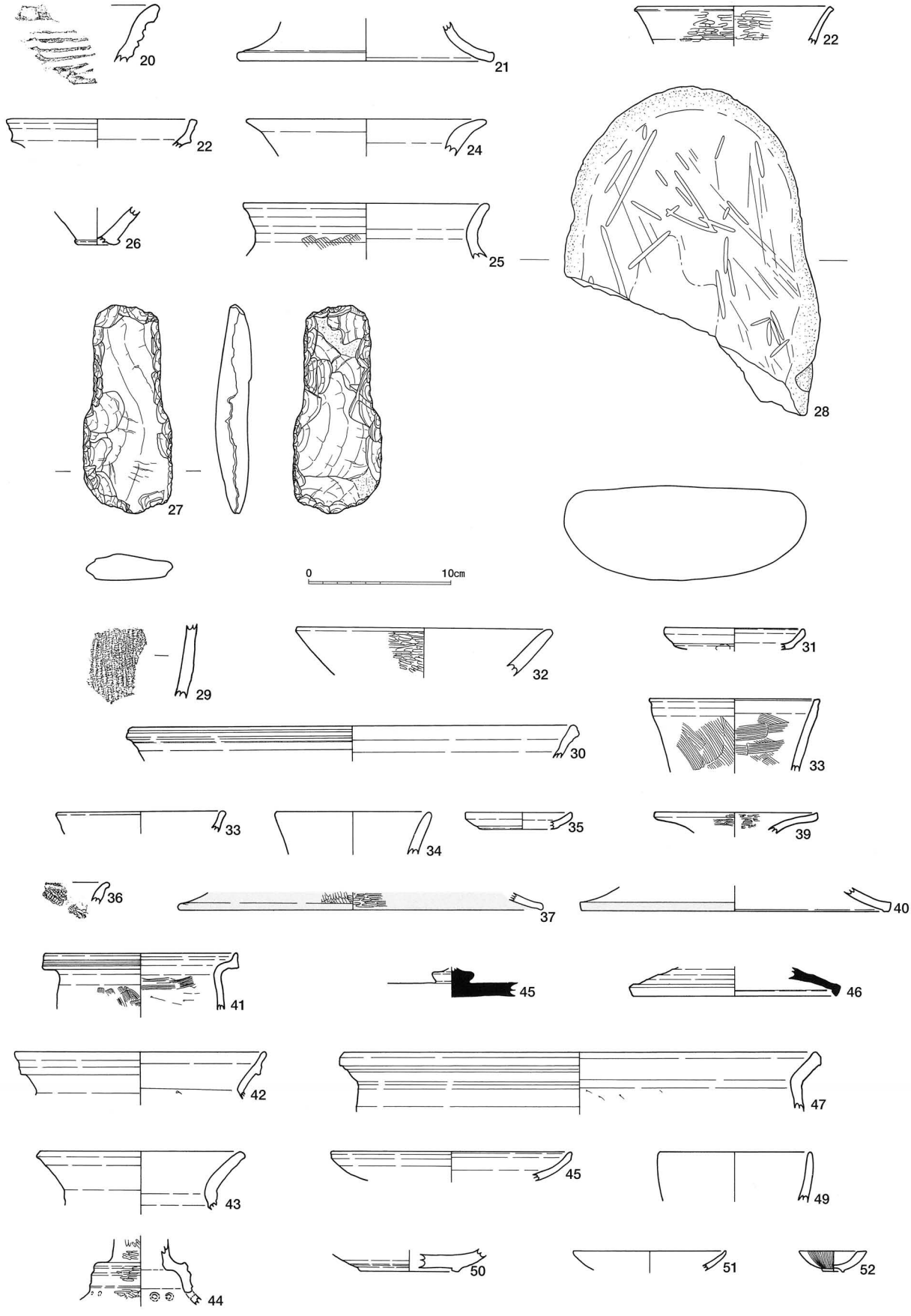


第6図　畑跡平面図及び断面図（S=1/80）



第7図　若竹町遺跡出土遺物実測図（1）（S=1/4）

1～14:SI01、15:SI01（試掘）、16・17:SB01、18・19:SB02



第8図　若竹町遺跡出土遺物実測図（2）（S=1/4）

20・21:SK02、22:SK04、23～28:SK05、29:SD14、30:SD21、31:SD24、32:SD33、41～52:包含層

Ⅱ 富崎（とみさき）遺跡

ⅰ）調査に至る経緯

平成19年9月25日、富山市婦中町富崎地内で個人住宅建築に先立つ埋蔵文化財所在確認の照会がなされた。平成17年9月に個人住宅建設に先立つ試掘確認調査が実施され、開発対象面積661㎡全てに遺跡の所在が確認された場所である。平成18年3月13日～27日にかけて154㎡を対象に発掘調査が実施され、古代の掘立柱建物2棟や中～近世の溝を検出していた【A地区】。

今回の住宅建築地は、平成17年9月に試掘確認調査で遺跡の所在が確認された場所で、A地区の南側約10mに隣接し位置する【B地区】。A地区同様、住宅建築に際し地盤改良工事が計画されたことから、108㎡を対象に発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成19年11月5日～11月28日まで延べ15日間にかけて実施した。本稿では、A地区とあわせて報告を行う。（鹿島）

第9図　調査対象地位置図（1/5,000）

ⅱ）遺跡の位置と環境

富崎遺跡は富山県のほぼ中央部である富山市婦中町富崎地内に所在し、山田川右岸の平野部（標高約26m）に立地する弥生時代終末期～近世の複合遺跡である。山田川を境にした左岸の呉羽山丘陵づたいと右岸の富崎丘陵・平野部は遺跡の密集地であり、各時代の遺跡が数多く存在する。

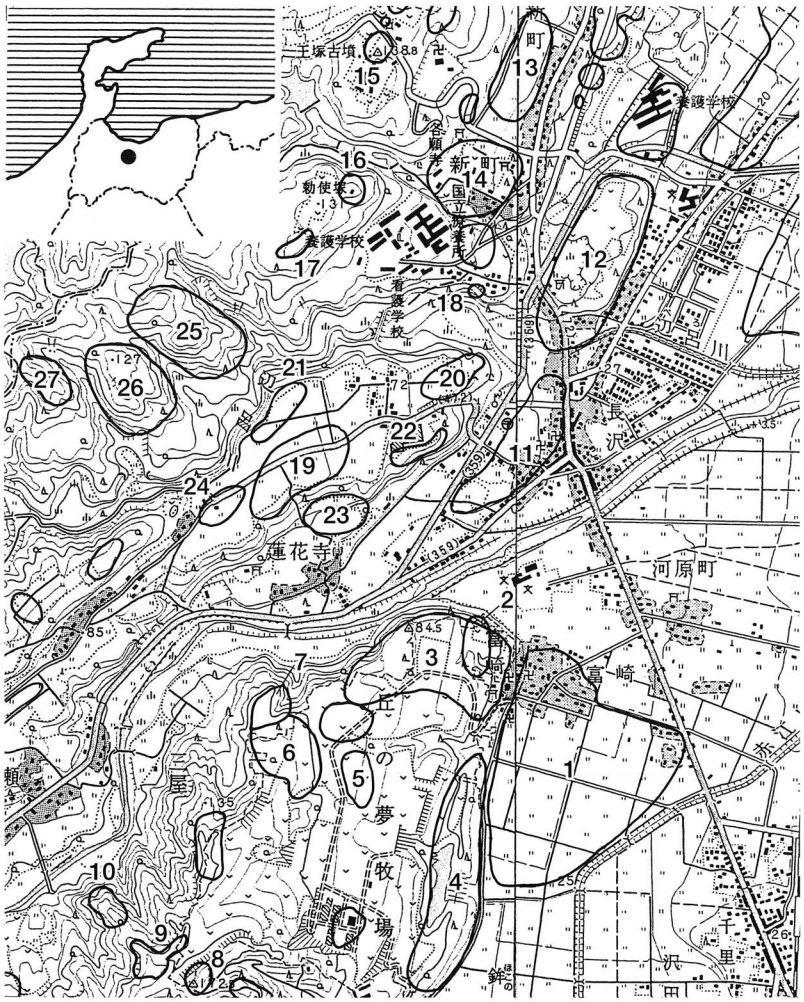
縄文時代　山田川左岸の河岸段丘上に位置する鏡坂Ⅰ遺跡（婦中町教委2000）で竪穴住居跡3棟、土器捨て場等が検出された。土器捨て場からは縄文土器や土偶・ミニチュア土器が出土し、祭祀的行為の可能性も指摘されている。また、550点以上の礫石錘も出土している。

弥生時代後期～古墳時代前期　井田川・山田川流域の扇状地と呉羽山丘陵南側の羽根丘陵・富崎丘陵に王塚・千坊山遺跡群（国指定史跡）が所在する。本遺跡西側の富崎墳墓群や富崎千里古墳群を含み、古墳出現期の動向を集落と墓地の両面から追うことができる貴重な事例である。越中を代表する前方後方墳である王塚古墳の他、日本海沿岸交流を示唆する四隅突出型墳丘墓群が存在する。

古代　羽根丘陵の東裾に位置する新町Ⅱ遺跡（婦中町教委1986）では掘立柱建物跡３棟や柵等が検出された。計画的な建物配置がなされ、中核的性格をもつ集落の可能性が指摘される。また、『越中志徴』や『肯構泉達録』によると高野山真言宗各願寺は大宝元（701）年に創建され、北陸道の寺院を支配する大きな勢力を有したという寺伝がある（婦中町1996）。

中世　本遺跡西側に位置する富崎城跡等の山城が多く築かれる。富崎城は戦国期の豪族である神保氏の拠点の一つで、富崎城を中心に構成される富崎城塁群は県内屈指の規模を誇るという（佐伯1991）。

そして、婦負郡支配の拠点であった長沢地域には臨済宗禅宗蓮華寺や律宗弘正院があり、政治・交通・宗教面で重要な役割を果たしたと考えられる。

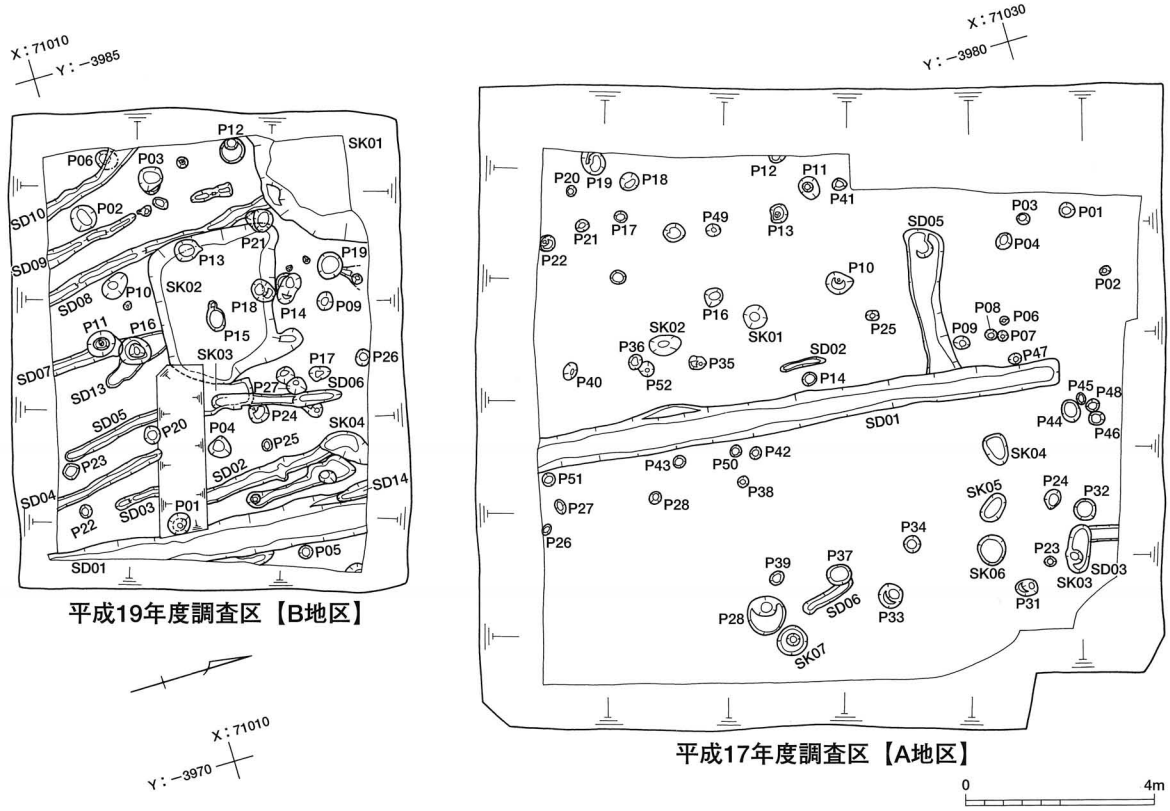


このような勢力の存在から周囲は婦負郡支配の要地と推測される。富崎遺跡周辺は生活に適した場所であり、地域の中核となるような遺跡が数多く存在することが窺える。

（鍋谷）

第10図　富崎遺跡と周辺の遺跡
（1：25,000）

1	富崎遺跡	14	各願寺前遺跡
2	富崎墳墓	15	王塚古墳
3	富崎城跡	16	勅使塚古墳
4	富崎千里古墳群	17	五ツ塚古墳
5	富崎南野遺跡	18	六治古塚墳墓
6	富崎赤坂遺跡	19	鏡坂Ⅰ遺跡
7	離山砦跡	20	鏡坂Ⅱ遺跡
8	森田山砦跡	21	鏡坂Ⅲ遺跡
9	赤坂砦跡	22	鏡坂墳墓群
10	下瀬砦跡	23	蓮華寺遺跡
11	鍛冶町遺跡	24	外輪野Ⅰ遺跡
12	千坊山遺跡	25	家老屋敷城跡
13	新町Ⅱ遺跡	26	長沢城跡
		27	長沢鐘突堂



平成19年度調査区【B地区】

平成17年度調査区【A地区】

第11図　遺構全体図（S=1/160）

iii）調査の概要

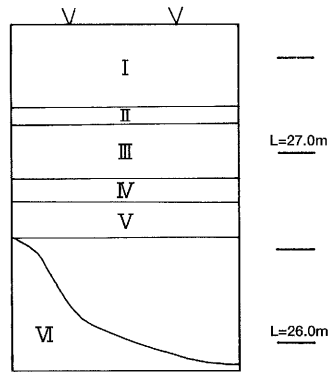
(1) 調査の方法

発掘調査区は調査年度ごとに北側の平成17年度調査区をA地区、南側の平成19年度調査区をB地区と呼ぶこととする。遺構番号および遺物番号は地区ごとに付し、他年度の遺物番号を本文内で用いる際にはSD01【B地区】のように表記し、区別することとした。

調査は重機で盛土や表土（Ⅰ～Ⅳ層）を除去し、遺物包含層（Ⅴ層）直上まで掘削した。遺物包含層は人力掘削し、出土遺物は測量機器（トータルステーション）を用いて三次元計測した。掘削後はジョレンを用いて遺構検出作業を行い、人力で遺構の発掘を行った。測量は測量機器（トータルステーション）を用いて図面記録を行い、公共座標（世界測地系）を使用した。

(2) 基本層序

基本層序は上からⅠ層（砂・礫を多く含む褐色土；造成盛土）、Ⅱ層（暗灰色土）、Ⅲ層（灰色～灰褐色土）、Ⅳ層（橙色鉄分を多く含む灰黄色土）、Ⅴ層（暗灰褐色土；遺物包含層）、Ⅵ層（淡黄色・青灰色シルト；地山）に大別した。Ⅴ層は16～28cmの堆積を確認し、Ⅵ層上面が遺構検出面である。



【A地区】

1. 遺構（第11図）

掘立柱建物2棟・溝5条・土坑7基・小ピット49基を検出した。以下記載される深さの数値はすべて遺構検出面からの値である。

(1) 古代

SB01　南北3間以上×東西2間の側柱建物で、桁行5.92m以上、梁行4.0m、主軸方向はN－2°－W、N－90°－Wである。P10・11・19・40、SK01・02を柱穴とし、直径0.3～0.6m、深さ0.4～0.5m。柱間は約2mである。19年度調査区には続かず、柱根や礎板、遺物は出土しなかった。

SB02　南北3間（以上）、6.72m（以上）の建物で東側にも平行する柱穴があると考えられる。主軸方向はN－7°－Wである。P32・33、SK06・07を柱穴とし、直径0.4～0.6m、深さ0.4～0.5m。柱間は約2.3mであることからSB01より大きくなると推測される。P33・SK06から須恵器が出土した。

主軸方向から2棟はほぼ同時期に存在したと考えられる。また、端部を水平に加工した直径10～20cmの柱を使用していたことが柱穴の土層断面から判明した。

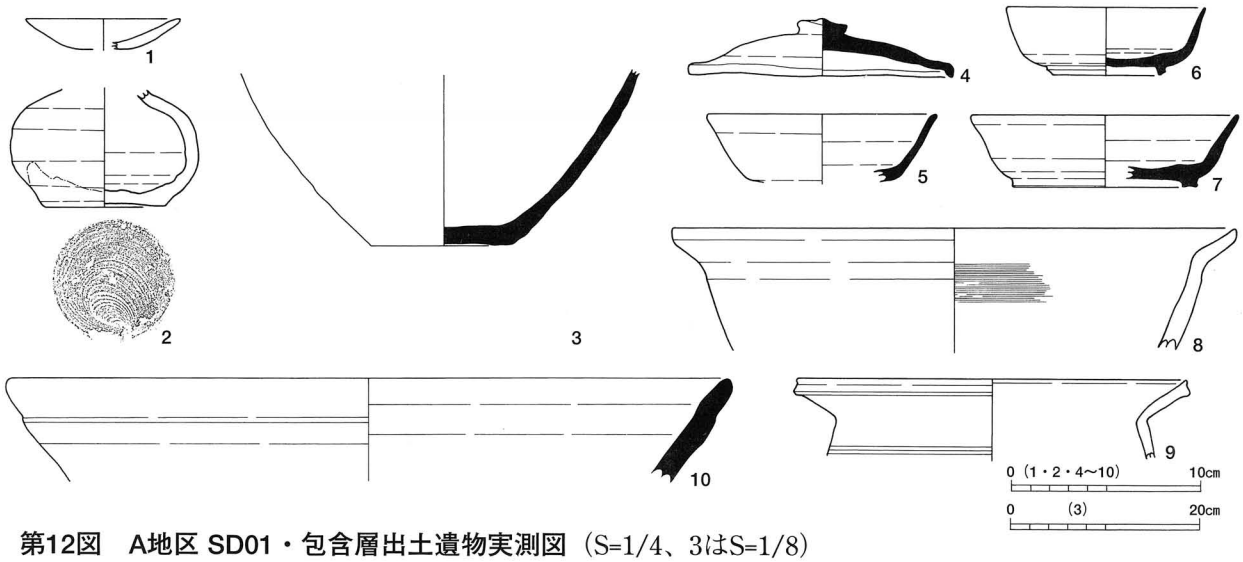
(2) 中世

SD01　調査区中央部を南北方向に走る幅0.8m、深さ0.2mの溝である。中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・青磁・曲物・炉壁等が出土した。

2. 遺物（第12図）

SD01　1は15世紀後半の中世土師器皿、2は14世紀頃の古瀬戸合子である。内外面に釉がかかり、底部に回転糸切り痕が残る。3は珠洲の甕底部で、内面に煤が付着する。

包含層出土　4～7は8世紀後半～末頃の須恵器で、4の宝珠形つまみをもつ杯蓋は口径11.7cmを測る。5は無台杯で内外面をロクロ撫でし、一部縦方向に指撫でする。6・7は底部ヘラ切りの有台杯で自然釉が付着する。6の高台端面は内傾し、7は平行する。8・9は土師器で、8の鍋は口縁部内外面を撫で、内面上部にカキ目が残る。9は長胴甕である。10は吉岡編年Ⅵ期（吉岡1994）の珠洲片口鉢で、円頭の端部をもつ。口縁内面に櫛目波状文、体部内面に9本1単位、幅2.5cmの卸し目が入る。



第12図　A地区 SD01・包含層出土遺物実測図（S=1/4、3はS=1/8）

【B地区】

1. 遺構（第11図）

掘立柱建物2棟・溝13条・土坑4基・小ピット27基を検出した。以下記載される深さの数値はすべて遺構検出面からの値である。

(1) 古代（第13・14図、写真図版6・7）

SB01　南北2間×東西2間の総柱建物で、桁行3.46m、梁行3.04m、主軸方向はN－7.5°－W、N－84.5°－Eである。P02・03・10・12～16・21を柱穴とし、直径0.45～0.71m、深さ0.1～0.37m。柱間は桁行約1.7m、梁行約1.5mである。柱根や礎板は検出されなかった。P02・03・10・14・21から土師器片が出土した。SK02・SD08より古い。

SB02　東西2間（以上）×南北2間の側柱建物で、桁行4.25m（以上）、梁行3.31m、主軸方向はN－2°－W、N－87.5°－Eである。P01・07・08・11・18・20・27を柱穴とし、柱根や礎板は出土しなかった。直径0.22～0.61m、深さ0.11～0.36m、柱間は桁行約2.1m、梁行約1.6mである。P11・18から土師器片が出土した。SK02・SD12より古く、P11－18間の柱穴は削平された可能性がある。

P04　長軸0.46m、短軸0.41m、深さ0.33mである。土師器・須恵器・炭が出土した。

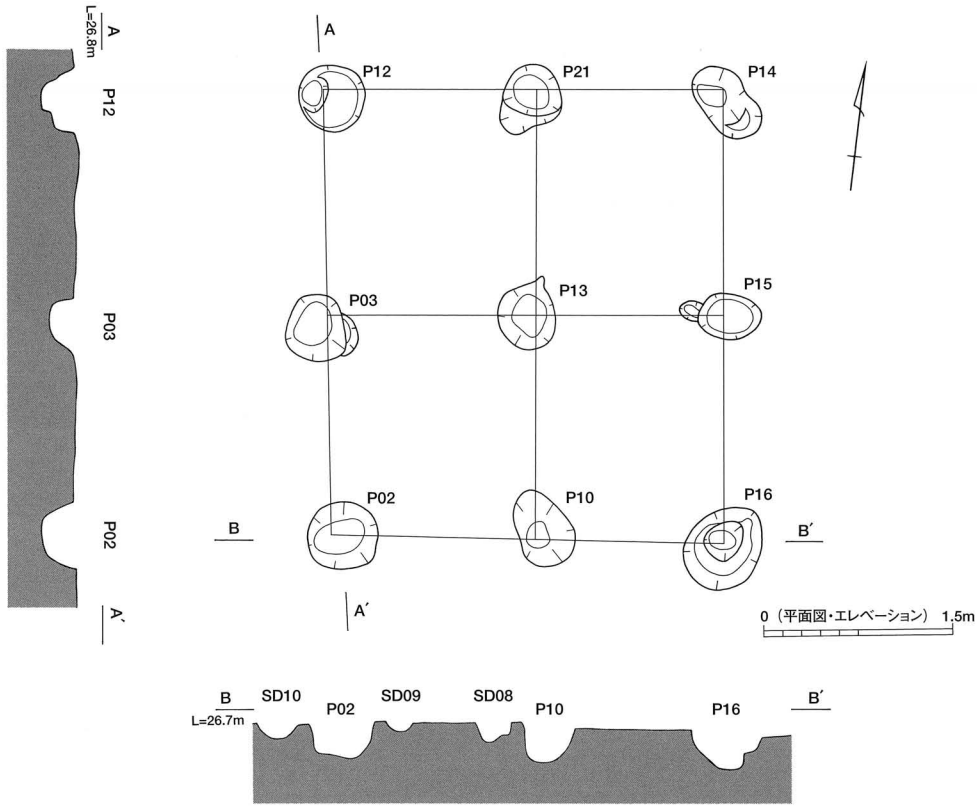
(2) 中世（第14～16図、写真図版7・8）

SD01　幅1.0m、深さ0.25mで、SD01【A地区】から連続する。土師器・須恵器・中世土師器・炉壁・木製品の他、大小の川原石が出土した。SD14より新しい。

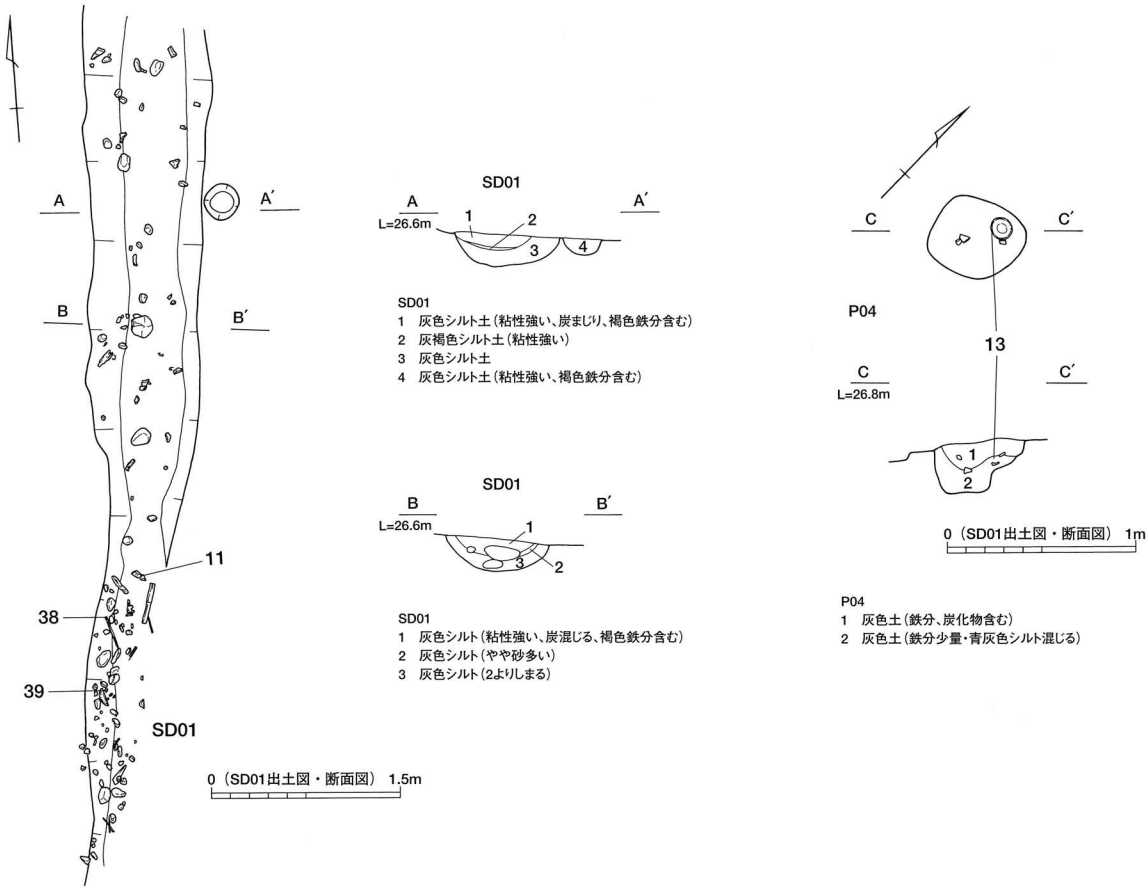
SK01　長軸2.36m以上、短軸2.01m以上、深さ0.82mで北側・西側調査区外へ続く。平面形態は円形と思われる。遺構上部の東側には被熱痕のある木片、北西の角には拳代以下の礫が集中して出土した。底部からは水がしみ出し、地山に食い込む状態で礫が敷き詰められていた。

礫は角がなく、ツルツルした表面をもった川原石である。石の大きさは握り拳代の小さなものから二人がかりでようやく持ち上げることのできる大きなものまでみられた。石の据わりをよくするためか、板状の石や割って平面を作った石も使用される。遺構の側壁には囲むように杭が刺さっていた。SD08より新しく、中世土師器・珠洲・漆器片・炉壁等が出土した。

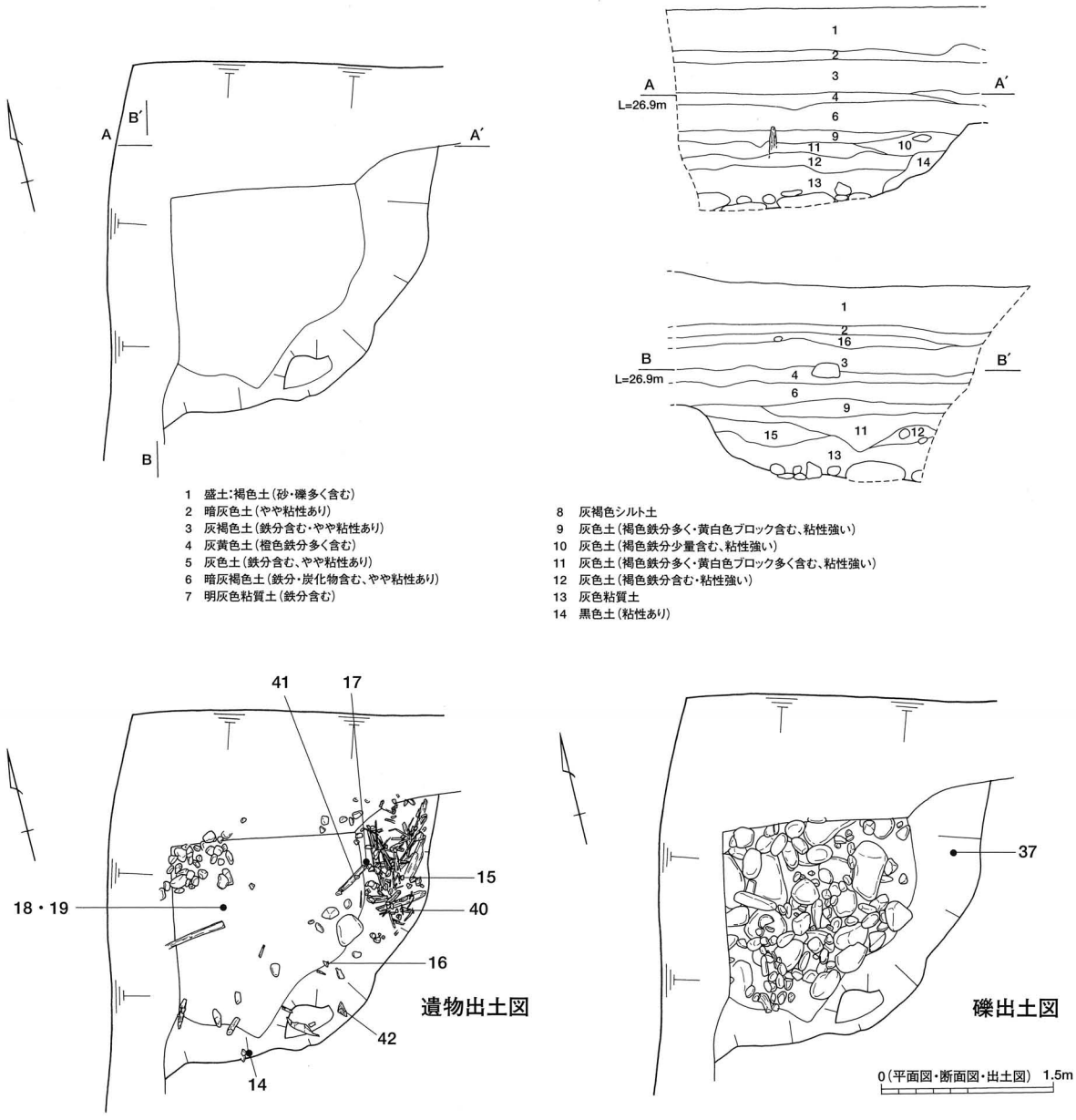
SK02　長軸3.25m、短軸2.85m、深さ0.26mで、調査区中央部に位置する。SK01に隣接し、平面形態は方形である。遺構東側に板状木製品、西側に大小の礫（川原石）が集中し、これらには被熱痕がみられた。その他、中世土師器・珠洲・木製品・礫・炉壁等が出土した。SK03・SD08・P13・15・18・21より新しい。



第13図　SB01平面図・エレベーション（S=1/60）



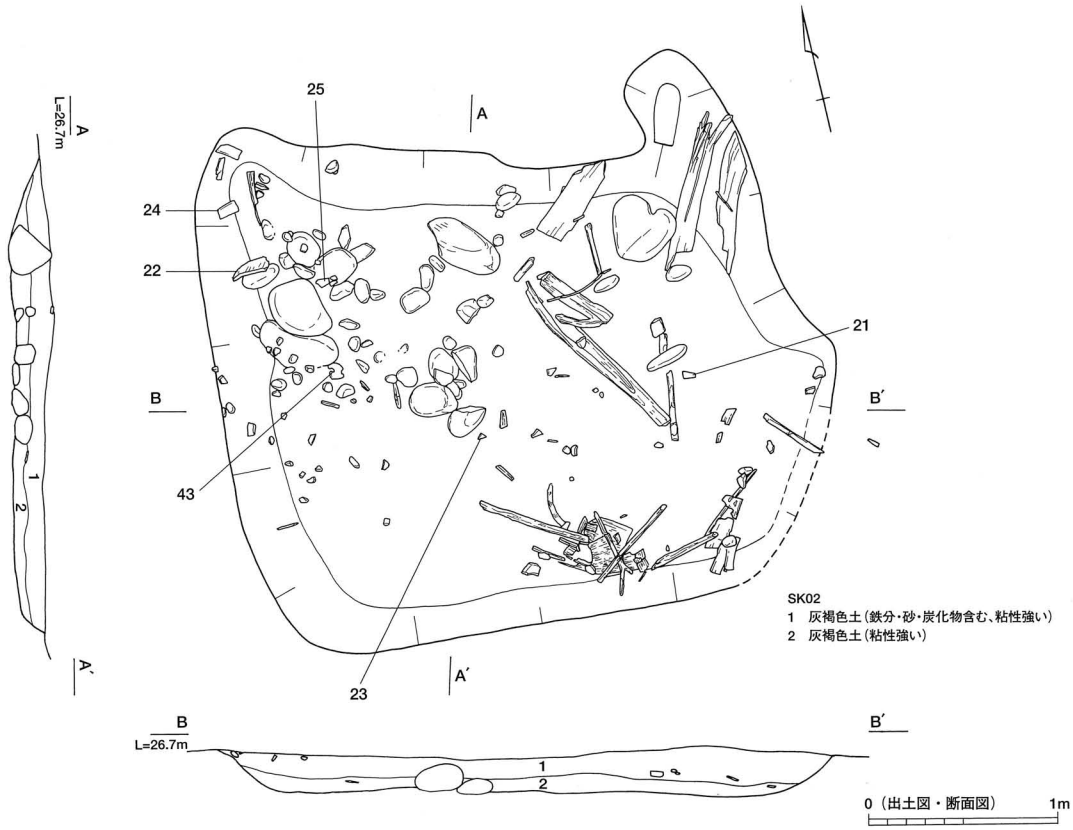
第14図　SD01出土図・断面図（S=1/60）、P04出土図・断面図（S=1/40）



第15図　SK01平面図・断面図・遺物の出土図・礫出土図（S=1/60）

2. 遺構（第17・18図、写真図版9・10）

遺構出土　11～13は須恵器甕または瓶類の体部である。11はSD01から出土した。外面平行叩きの上からカキメを施し、内面には同心円紋当て具痕が残る。12はSD02出土である。13はP04出土の杯蓋で、宝珠形のつまみをもつ。14～20はSK01出土である。14の須恵器有台杯は見込みの外縁部に凹線が巡る。15は土師器の底部である。16は15世紀末～16世紀初頭の中世土師器皿で、口縁部は幅広く横撫でし、端部を外反させる。17・18は珠洲である。17の壺は水平嘴頭の口縁部をもち、外面に自然釉がかかる。吉岡編年、Ⅳ3期に相当する。18の片口鉢は口縁内面に櫛目波状文があり、吉岡編年Ⅵ期に相当する。19は不明遺物である。表面はきれいな面をもち、色は橙色・淡橙色・灰色にわかれる。重量は16.87ｇで軽い。20は炉壁片で、重量は16.82ｇである。21～25はSK02出土から出土した。21は須恵器杯蓋、22は珠洲甕底部である。甕の内面には煤が付着する。23の瀬戸美濃天目茶碗は内外面に黒褐色の鉄釉が施される。24は緑泥片岩製の仕上砥で、剥離が激しく、僅かであるが側面に使用面が残る。25は炉壁片で、重量は111.12ｇである。26は土師器鉢か。SK04から出土した。



第16図　SK02遺物出土図・断面図（S=1/40）

表1　B地区遺構一覧

掘立柱建物

遺構No.	方位	間数	桁行 (m)	梁行 (m)	建物占有面積 (㎡)	出土遺物	備考
SB01	N-7.5°-W N-84.5°-E	2間×2間	3.46	3.04	10.5184	土師器	総柱建物 P02・03・10・12～16・21
SB02	N-2°-W N-87.5°-E	2間以上×2間	4.25以上	3.31	14.0675以上	土師器	側柱建物 P01・07・08・11・18・20・27

溝

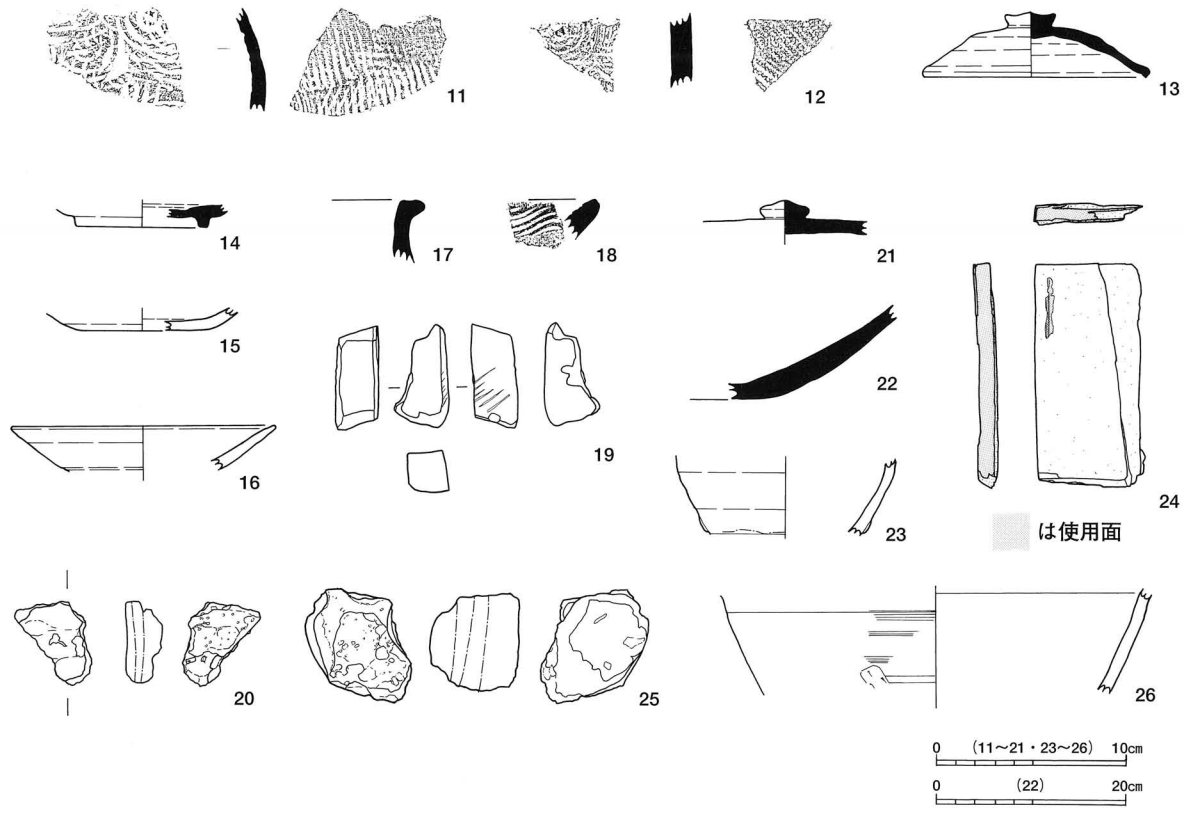
遺構No.	方向	検出長 (m)	幅 (m)	深さ (m)	出土遺物	備考
SD01	N-4°-E	(6.95)	1.00	0.25	土師器、須恵器、中世土師器、炉壁、曲物、木製品、自然木、木片、砥石、石製品？、炭、虫の羽、割繰	SD14より新しい
SD02	N-5.5°-W	(2.72)	0.33	0.14	土師器、須恵器、炭	
SD03	N-4.5°-W	(0.98)	0.22	0.14	-	
SD04	N-10.5°-W	(2.40)	0.25	0.15	-	
SD05	N-10.5°-W	(2.13)	0.21	0.12	土師器、須恵器	
SD06	N-12.5°-E	2.71	0.30	0.26	土師器	SK03より古い
SD07	N-7°-W	(1.54)	0.28	0.19	土師器	P11より古い
SD08	N-12°-W	(5.03)	0.30	0.17	土師器、須恵器、瀬戸美濃、越中瀬戸？、炉壁、木片	SK01・02より古い、P13・21より新しい
SD09	N-10.5°-W	(2.08)	0.17～0.29	0.20	土師器	
SD10	N-14°-W N-37°-W	(2.54)	0.24～0.48	0.13	土師器	P06より古い
SD12	N-5°-W	2.37	0.18～0.57	0.16	-	P07・08より新しい
SD13	N-25°-W	(1.66)	0.46	0.12	土師器	SK02・P16より古い
SD14	N-5.5°-W	(0.66)	0.33	0.23	-	SD01より古い

土坑

遺構No.	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	出土遺物	備考
SK01	円形	(2.36)	(2.01)	0.82	土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、青磁、砥石、炉壁、礫、炭、漆器片、木製品、自然木、木片、種、骨、虫	SD08より新しい
SK02	方形	3.25	2.85	0.26	土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、砥石、石製品、炉壁、木製品、自然木、木片、炭、礫、虫の羽	SK03・SD08・13・P13・15・18・21より新しい
SK03	長方形	(1.03)	0.58	0.09	土師器、炭、炉壁、木片	SK02より古い、SD06より新しい
SK04		(1.08)	0.58	0.11	土師器	

小穴

遺構No.	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	出土遺物	備考
P01	0.47	0.43	0.17	-	
P02	0.56	0.53	0.25	土師器	
P03	0.52	0.48	0.23	土師器	
P04	0.46	0.41	0.33	土師器、須恵器、炭	
P05	0.29	0.29	0.10	-	
P06	0.48	0.40	0.10	-	SD10より新しい
P07	0.22	0.19	0.24	-	SD12より古い
P08	0.34	0.25	0.24	-	SD12より古い
P09	0.39	0.33	0.18	-	
P10	0.60	0.42	0.29	土師器	
P11	0.61	0.51	0.33	土師器	SD07より新しい
P12	0.52	0.51	0.28	-	
P13	0.50	0.44	0.10	-	SK02・SD08より古い
P14	0.66	0.51	0.28	土師器	
P15	0.48	0.35	0.14	-	SK02より古い
P16	0.71	0.59	0.27	-	SD13より新しい
P17	0.45	0.30	0.09	-	
P18	0.54	0.40	0.11	土師器	SK02より古い
P19	0.59	0.52	0.29	土師器	
P20	0.38	0.33	0.36	-	
P21	0.45	0.40	0.37	土師器	SK02・SD08より古い
P22	0.28	0.25	0.17	-	
P23	0.31	0.30	0.07	-	
P24	0.39	0.36	0.13	-	
P25	0.24	0.22	0.08	-	
P26	0.33	0.28	0.36	土師器、炭	
P27	0.39	0.34	0.32	-	



第17図　B地区　遺構出土遺物実測図（S=1/4、22はS=1/8）

包含層出土　27～30は8～9世紀の須恵器で、27は杯蓋、28は有台杯である。29の壺頸部は外面に1条の沈線が巡り、内外面には自然釉がかかる。30は外面平行叩きの上からカキメを施し、内面は同心円紋当て具痕の上からロクロナデを施す。31の八尾片口鉢は内面に浅い卸し目が残る。32は11世紀後半～12世紀前半の白磁椀で、体部が丸みをもち、口縁部が外反する。33の瀬戸美濃皿は見込みに印花を押捺する。34は越中瀬戸の内禿皿である。断面三角形の削り出し高台で、外面に灰釉を施す。トレンチの埋め戻し土から出土した。35は伊万里である。有台椀で低部に波状文が施される。

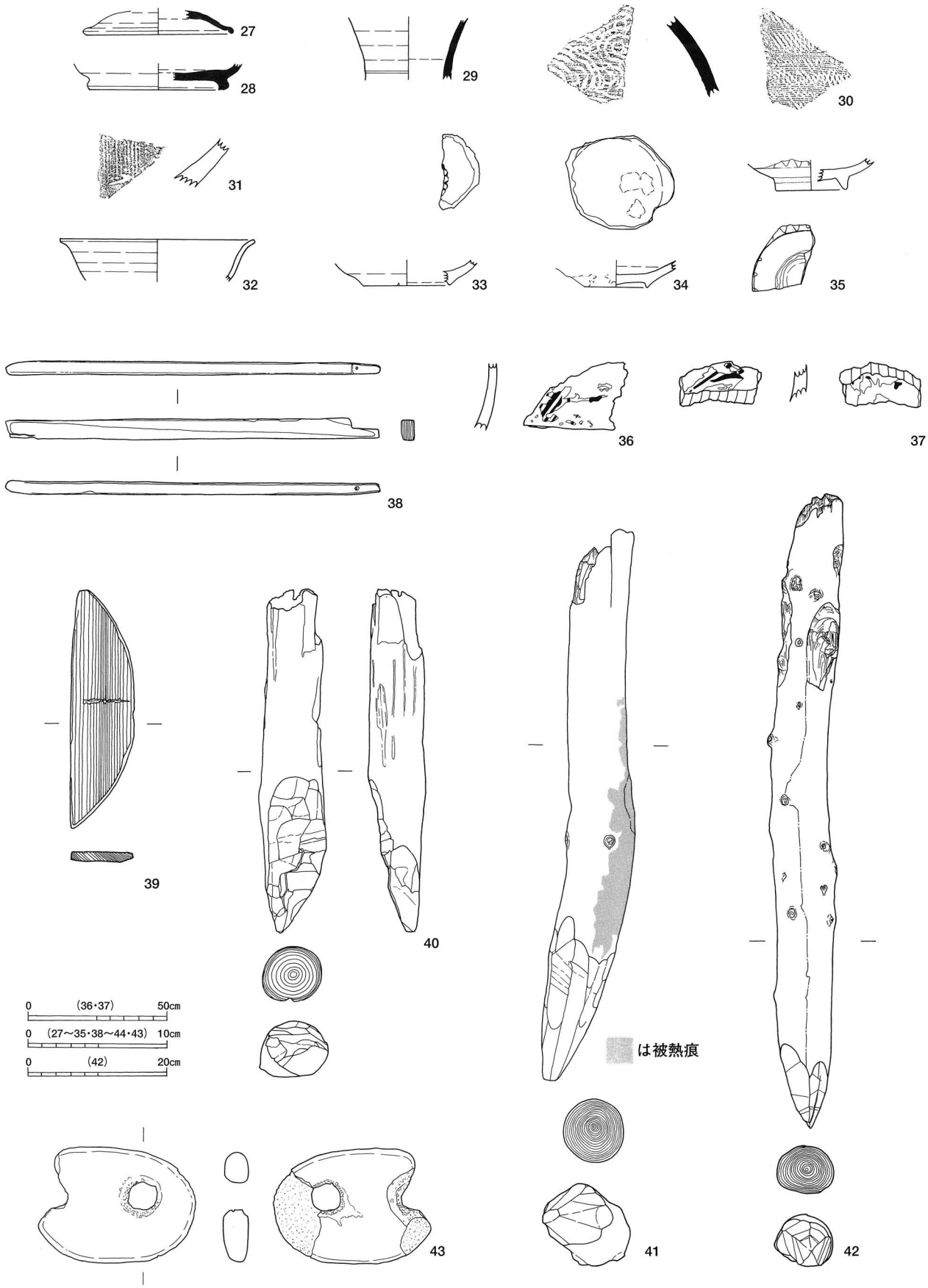
木製品・石製品　36・37はSK01出土の漆器片である。漆の剥落が激しく、赤色漆の文様は判別できない。38はSD01出土の不明木製品で、片端側面に小孔がみられる。39の曲物底板はSD01から出土した。40～42は杭である。自然木をそのまま使用し、先端だけが加工される。42には樹皮も残っていた。41は一部被熱痕がある。SK01上部東側の木片集中部に混入していた。40・42は側壁に刺さっていた杭である。43は不明石製品で、2孔の穴がみられる。石材は砂岩である。

iv）まとめ

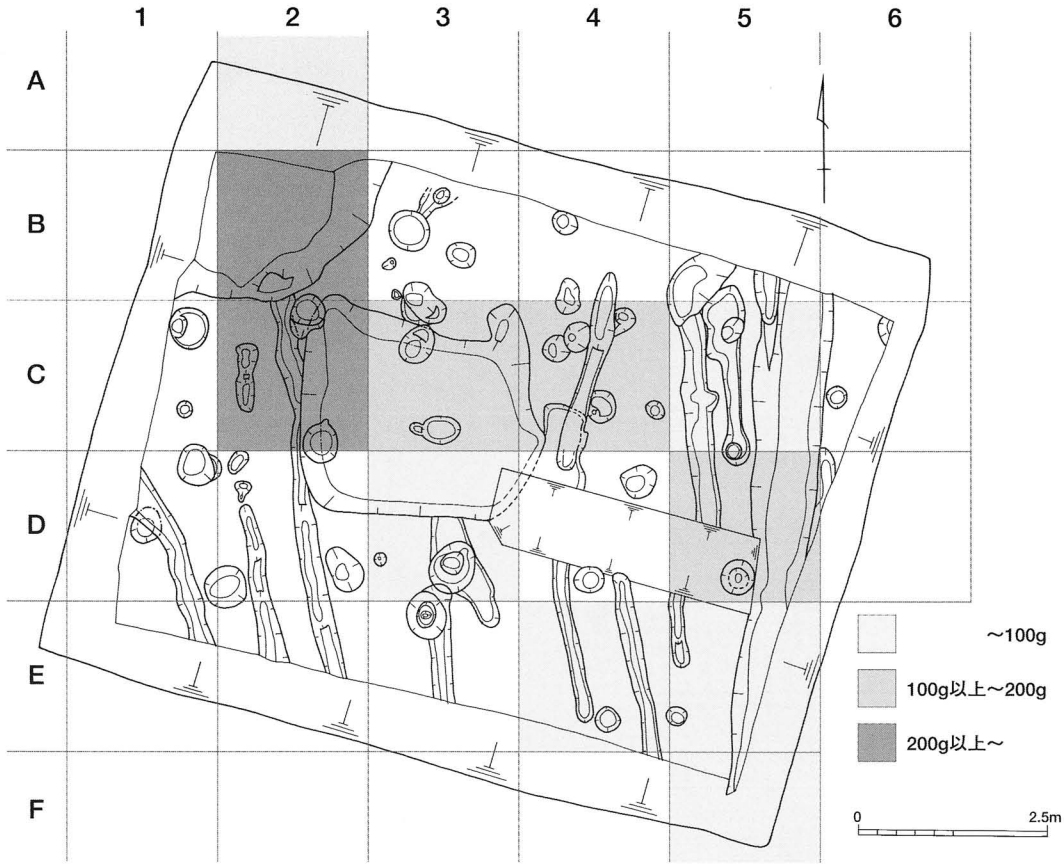
古代の集落

掘立柱建物を2棟検出し、いずれもSB01・02【A地区】と主軸方向が近似する。SB01は上記の建物とほぼ同時期であり、倉庫のような建物だったと考えられる。SB01に近接するSB02は桁行方向が他の建物と異なるため、3棟とは別時期の遺構である。

建物の柱穴からは年代を特定する遺物は出土しなかったが、別の柱穴からは須恵器が出土した。概ね田嶋編年、Ⅳ2期（石川考古学研究会・北陸古代土器研究会1988）に位置付けられるとみられる。



第18図　B地区 包含出土遺物、木製品・石製品実測図（S=1/4、36・37はS=1/2、42はS=1/8）



第19図　B地区　炉壁分布図（S=1/10）※4点：120.87g分は地点不明のため除外

また、北西－南東方向に伸びるSD03～05・07～10は畑跡と推測され、遺構の重複からSB01廃絶後、一時耕作地になり、その後SB02が建てられたとみられる。

中世の集落

調査区東端でSD01【A地区】の延長溝を検出した。A地区からの検出長は南北約21.7mに及び、このまま南へ続くと推測される。

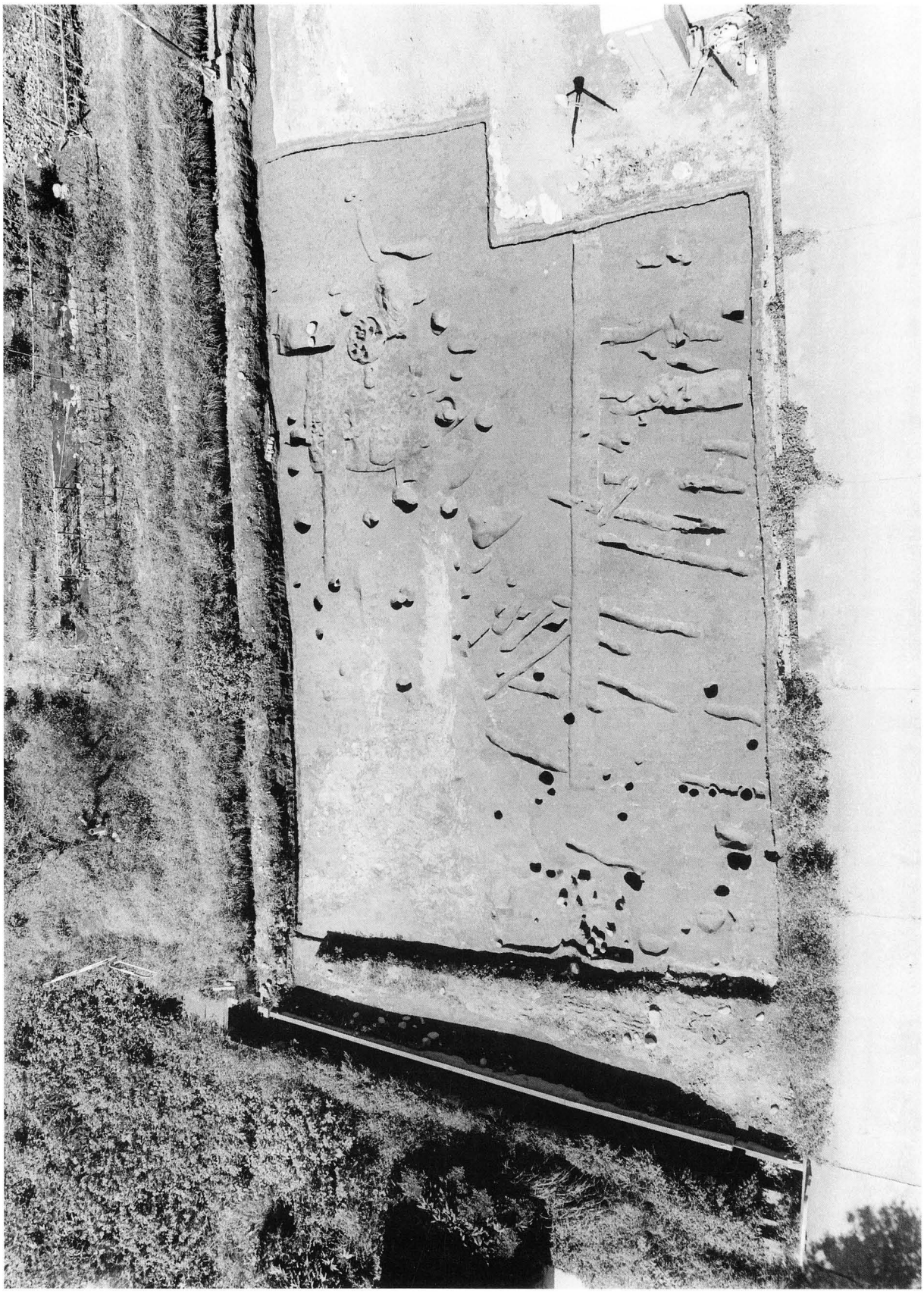
調査区北西のSK01は池跡とみられ、底部には川原石が敷き詰められる。また、遺構側壁に刺された杭は、周囲を取り囲むような状態であった。SK01の東側には方形竪穴状土坑（SK02）がある。出土した板状木製品や川原石には被熱痕のあるものもみられ、SK02は作業場として使用された可能性も考えられる。その他、大小の礫が遺構西側に集中して出土し、これらは意図的に配置されたようにもみえる。

SK01から15世紀終わり～16世紀初頭の中世土師器皿や吉岡編年、Ⅳ3期・Ⅵ期相当の珠洲が出土していることから、中世集落は室町～戦国時代にあたると考えられる。

製鉄関連遺物の出土

中世遺構とその周辺で炉壁片が出土した（第19図）。調査区西側～中央部のSK01・02付近に多くみられ、特にB2・C2では200ｇ以上の炉壁片を確認した。

富崎城は別名滝山城または福山城ともいい、『越登賀三州志故墟考』では嘉吉元（1441）年に神保八郎左衛門が居城したと伝える。富崎城の城下町には、戦国時代、鍛冶屋の集団が住んでいたという伝承の存在も指摘されており（佐伯1991）、近世には富崎鋳物師の存在が真継家文書に記される（婦中町1996）。今回の調査区付近ではこれらの前身となるような製鉄に関わる作業が行われていたと推測される。（鍋谷）



調査区全景空中写真

遺構検出東側（北から）

遺構検出西側（北から）

遺構検出

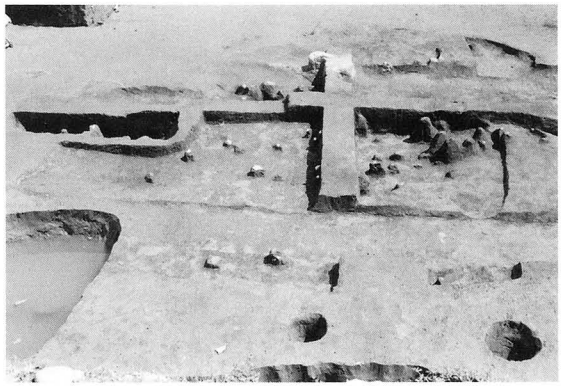
遺構掘削

遺構出土状況（北から）

SK05土層断面（南から）

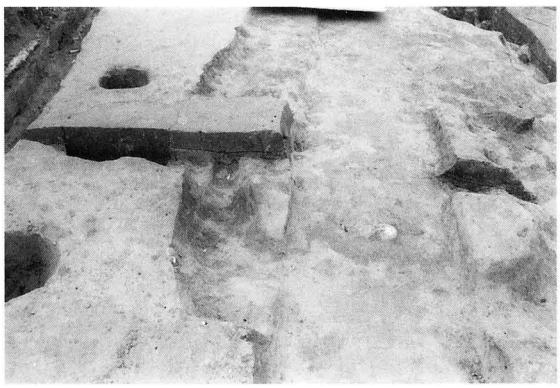
SI01・SB01完堀状況（西から）

SI01土層断面（北から）

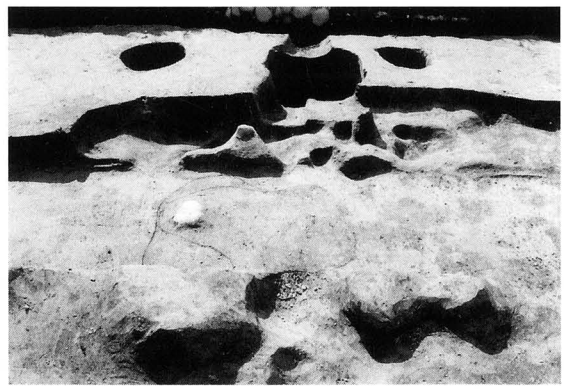


SI01遺物出土状況（西から）

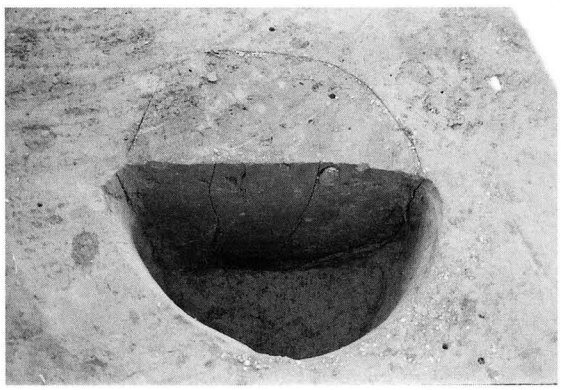
SK08遺物出土状況（西から）



SI01竈土層断面（南から）



SI01竈完堀（東から）



SP01（SB01）土層断面図（南から）

SP06（SB01）完堀（南から）

畑跡完堀（北から）

SD22（畑跡）土層断面（東から）

測量

SB02完堀（南から）

SP42（SB02）土層断面（南から）

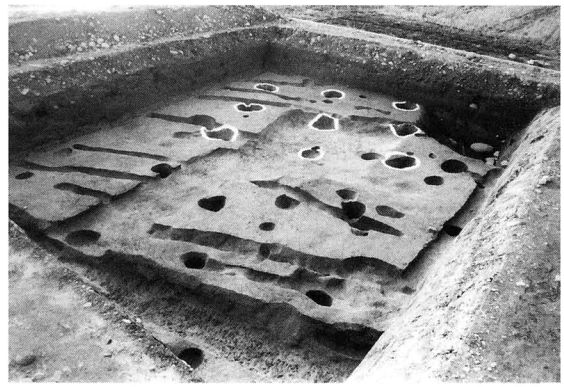
基本層序・西壁南部

基本層序・西壁北部

出土遺物

【B地区】調査区全景（北から、白ペンキはSB01）

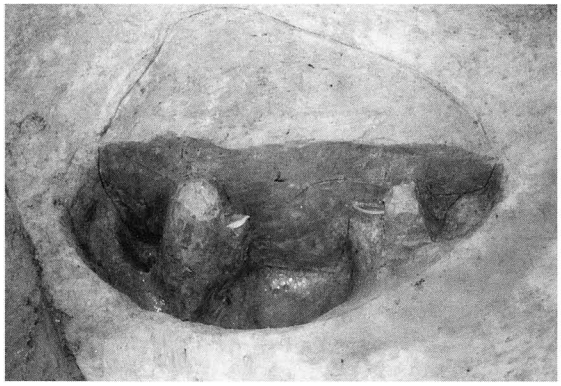
遺構検出（南から）



遺構完掘（北東から、白ペンキはSB01）

SB01柱穴、P12完掘（南西から）

SD08・SB01柱穴、P21土層断面（南から）



P04土層断面（南東から）

P04遺物出土状況（南西から）

SD01遺物出土状況（北から）

SK01杭出土状況（北から）

SK01遺物出土状況（北から）

SK01礫出土状況（南西から）

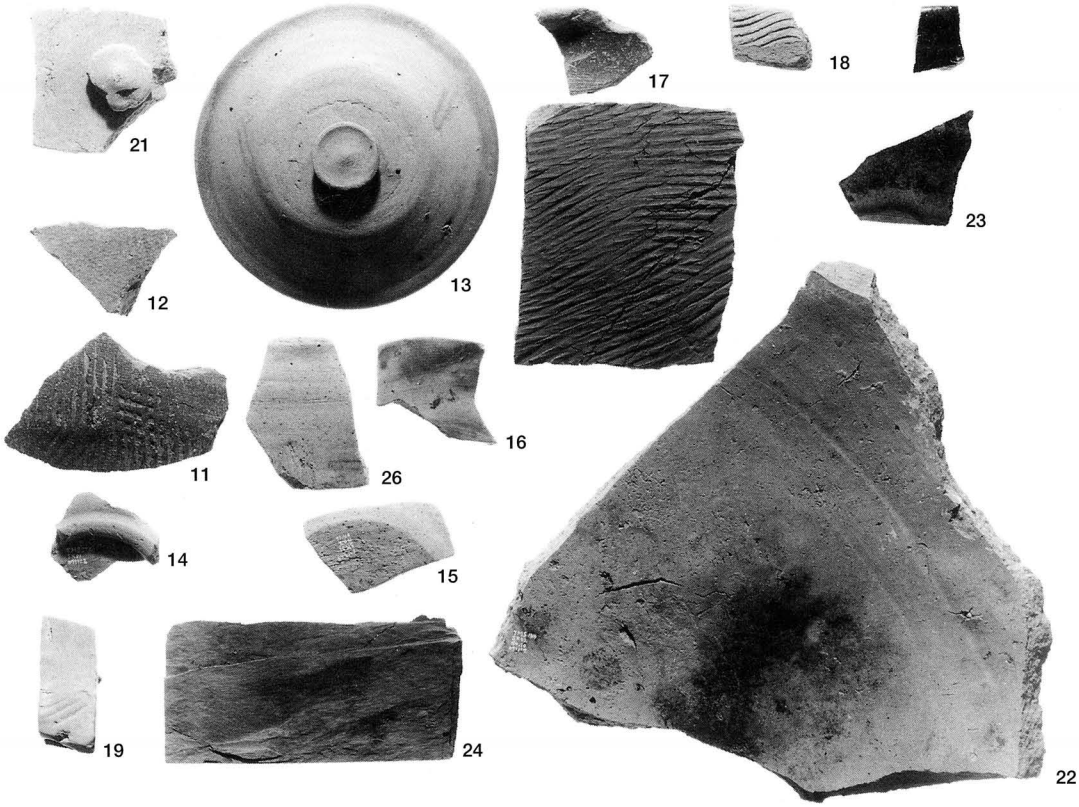
SK02遺物出土状況（北から）

SK02礫出土状況（北から）

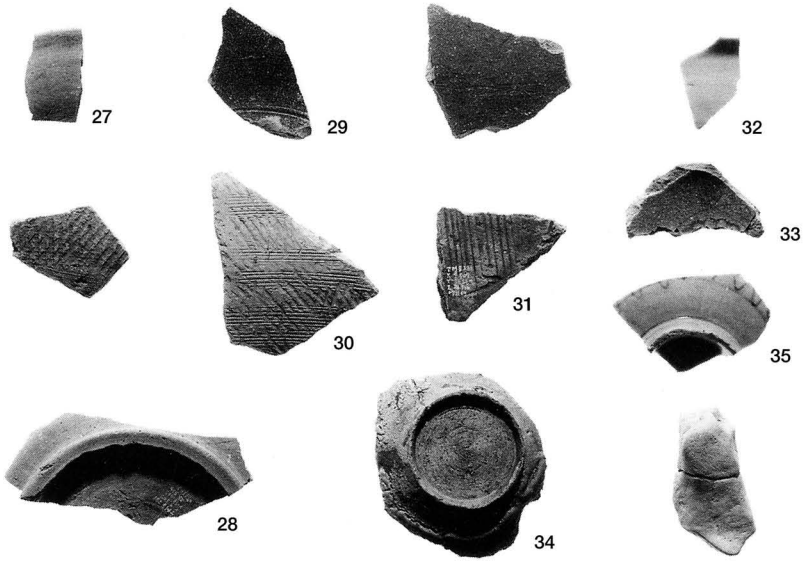
SK01杭（42）抜き取り（北から）

SK02木製品出土状況（北東から）

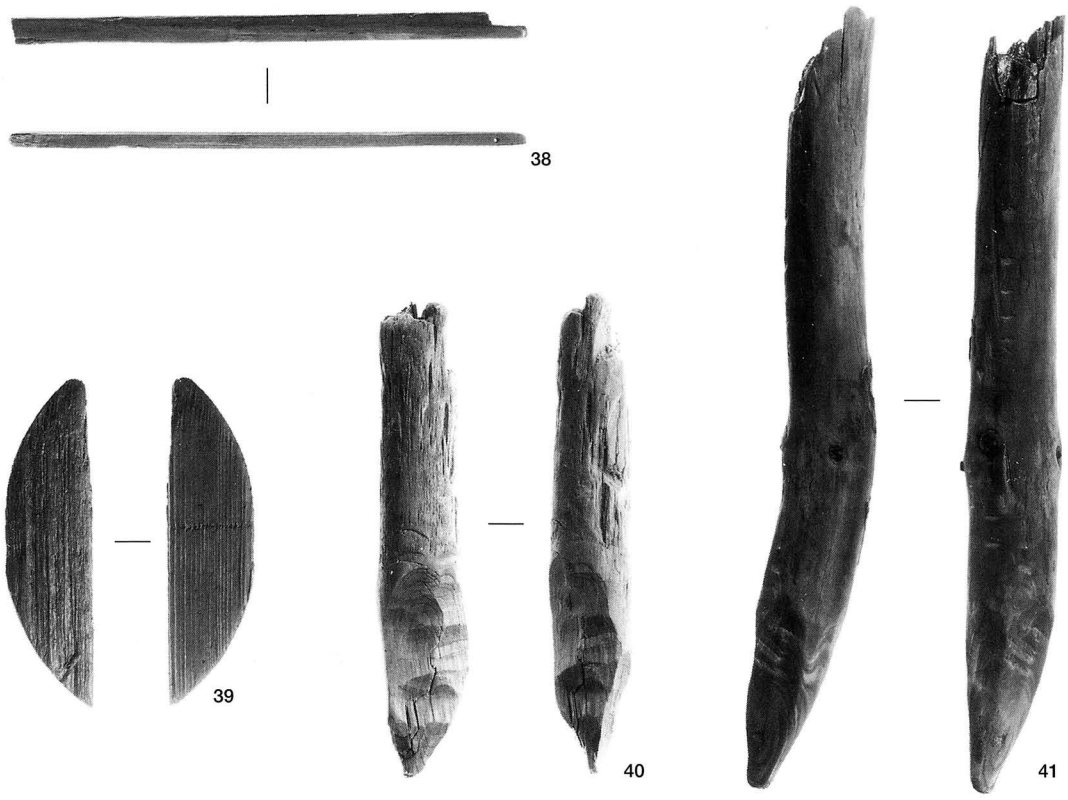
SK02完掘（北から）



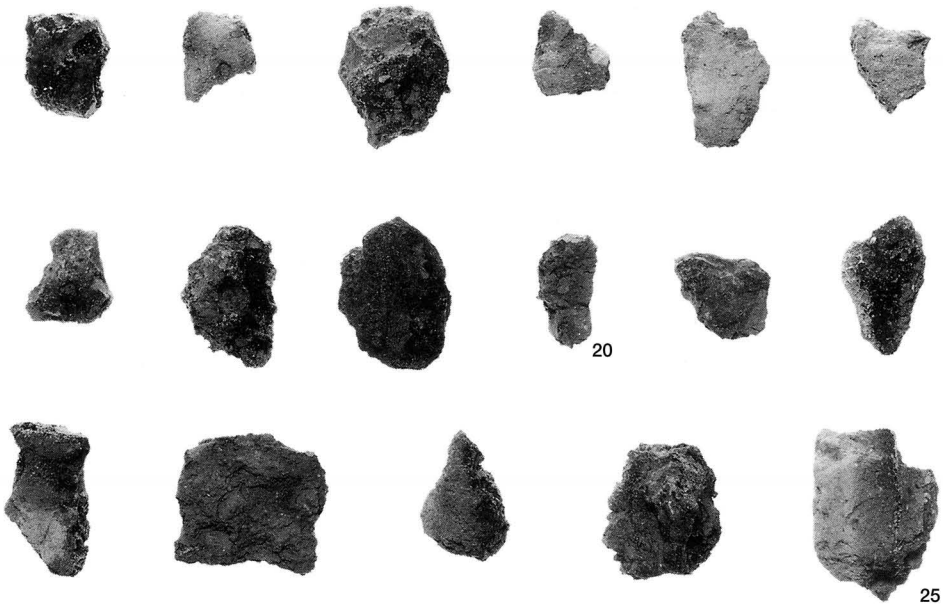
遺構出土遺物（スケールは約1/3）



包含層出土遺物（スケールは約1/3）



木製品（スケールは約1/4）



炉壁片（スケールは約1/3）

引用・参考文献

ア　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　1988『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編・報告編

サ　佐伯哲也　1990『富崎城塁群の変遷－富崎城とその周辺の城－』

　　佐伯哲也　1991「富崎城塁群の変遷」『大境』第13号　富山考古学会

タ　(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1996『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』

　　富山市教育委員会　2000『富山市上新保遺跡発掘調査報告』

　　富山市教育委員会　2002『富山市吉岡遺跡・経力遺跡発掘調査報告』

　　富山大学考古学研究室　1989『越中上末窯』富山大学研究報告第３冊　富山大学人文学部考古学研究室

ハ　婦中町　1996『婦中町史』通史編

　　婦中町教育委員会　1986『新町Ⅱ遺跡の調査－富山県婦中町新町所在の古代・中世遺跡調査報告－』

　　婦中町教育委員会　2000『外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡発掘調査報告』

　　婦中町教育委員会　2003『富山県婦中町鍛冶町遺跡発掘調査報告』

マ　森　隆　2005「富山県の中世土器（資料編２）－道場Ⅰ遺跡出土資料の検討と中名遺跡群出土資料の総括－」『富山考古学研究紀要第８号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

ヤ　吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

報告書抄録

ふりがな	とやましないいせきはっくつちょうさがいよう　さん
書名	富山市内遺跡発掘調査概要　Ⅲ
副書名	若竹町遺跡・富崎遺跡
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	25
編著者名	堀内大介・鹿島昌也・鍋谷仁美
編集機関	富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0091　富山市愛宕町1丁目2－24　　TEL 076-442-4246
発行年月日	西暦2008年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
わかたけちょう 若竹町遺跡	富山市悪王寺(あくおうじ) 地内	16201	201527	36度 37分 43秒	137度 13分 24秒	20070808 ～ 20070922	275	個人住宅建築
とみさき 富崎遺跡	富山市婦中町(ふちゅうまち) 富崎(とみさき)地内	16201	362050	36度 38分 9秒	137度 7分 39秒	20071105 ～ 20071128	108	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若竹町遺跡	集落	縄文時代		縄文土器・	
		弥生時代後期	土坑	弥生土器・打製石斧・砥石	
		古墳時代前期		古式土師器	
		平安時代	竪穴住居・掘立柱建物・溝・畑	須恵器・土師器	
		鎌倉時代	掘立柱建物・ピット	中世土師器	
		江戸時代		越中瀬戸・近世陶磁器	
富崎遺跡	集落	平安時代	掘立柱建物・ピット・畑	土師器・須恵器	
		中世	溝・土坑・池	中世土師器・珠洲・古瀬戸・瀬戸美濃・八尾・白磁・越中瀬戸・木製品・炉壁・砥石・漆器片・不明石製品	

要約

（若竹町遺跡）

本遺跡は熊野川支流の土川右岸に形成された集落跡である。今回の調査によって、弥生時代、平安時代、鎌倉時代の集落跡が検出された。

弥生時代の竪穴状土坑は、規模・形状から竪穴住居と考えられる。

平安時代には、竪穴住居廃絶後に掘立柱建物が建てられていた。周辺に生産域である畑跡が広がっている。

鎌倉時代の掘立柱建物の柱穴からは、13世紀中頃の中世土師器が出土している。

（富崎遺跡）

平安時代及び室町～戦国時代の集落を検出した。

平安時代の掘立柱建物2棟が検出され、うち1棟は総柱建物の倉庫と考えられる。また、畑跡と推測される溝も検出され、調査区は居住地や耕作地として利用されていた。

中世遺構周辺で炉壁片が出土した。富崎地区には鍛冶屋の伝説があり、近世には富崎鋳物師の存在が記されることから、調査区付近で製鉄に関わる作業が行われていたと推測される。

富山市埋蔵文化財調査報告25

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ

—若竹町遺跡・富崎遺跡—

発行日　2008(平成20)年3月18日
発　行　富山市教育委員会
編　集　富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒930-0091　富山市愛宕町1丁目2番24号
TEL:076-442-4246　FAX:076-442-5810
E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷　中央印刷株式会社